

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

仏教統一論

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

村上 専精 著
仏教統一論

第一編大綱論全文
第二編原理論序論
第三編仏陀論序論

書肆心水

Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

目次

仏教統一論 第一編 大綱論

緒言 一八
再版の辞 三四
凡例 三云

序論

第一章 研究の困難	三〇
第二章 研究の分類	三一
第三章 研究の用意	三七
第四章 研究の目的	四二
第五章 研究の順序	四五
本論第一根底論	五〇
第一章 総論	一

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第二章 インドの歴史に就て論ず	五三
第一節 古代インド思想の潮流	五三
第二節 祈迦の思想に被りし影響	五四
第三節 古代インド思想の二系統	五六
第三章 祈迦の伝記に就て論ず	五九
第一節 祈迦牟尼仏の略伝	五九
第一項 祈迦の出家発心に就て論ず	六四
第二項 出家の因縁	六四
第三項 出家の願望	空七
第二節 祈迦の仙人歴間に就て論ず	六六
第一項 跋伽氏に対する問答の要領	六九
第二項 阿羅藍仙人に対する問答の要領	七〇
第四節 祈迦の悪魔降伏に就て論ず	七二
第一項 無師独悟の六年苦行	七二
第二項 悪魔の分類及びその性質	七四
第三項 菩提樹下の降魔	七七
第五節 祈迦大悟の正覚に就て論ず	八〇
第一項 生死問題解答の方式	八〇
第二項 涅槃問題解答の方式	八二
第三項 自利と利他との関係論	八五

SAMPLE
Shoshi-hinsui.com

第四章 积迦の教義に就て論ず	八八
第五章 結論	九一
本論第一 教綱論	
第一章 総論	九八
第二章 縁起的教綱論	一〇二
第一節 各縁起説の根本的綱領	一一三
第二節 苦集滅道の略解	一一四
第三節 十二縁起の略解	一一九
第四節 小乗四諦説と大乗頼耶縁起説の異同論	一二二
第一項 頼耶縁起説の概論	一二三
第二項 比較的異同論	一二六
第五節 小乗四諦説と大乗真如縁起説との異同論	一二八
第一項 真如縁起説の概論	二一六
第二項 比較的異同論	二二〇
第六節 小乗四諦説と大乗四諦説の異同論	二二三
第一項 経文の抄出	二二三
第二項 古人の見解	二二五
第三項 自己の私見	二二六

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第四節	涅槃寂靜印の解	一七〇
第五節	小乗三法印と大乗二法印との異同論	一七二
第一項	大乗二法印の概論	一七三
第二項	比較的異同論	一七五
第六節	小乗三法印と大乗一法印との異同論	一七六
第一項	大乗一法印の概論	一七七
第二項	比較的異同論	一七八
第七節	三法印の結論	一八三
第一項	四諦十二緣起に対する異同論	一八二
第二項	三法印の根本義	一八四
第三項	三法印の終極理想	一八六
第四章	結論	一八八
本論第三 大系論		
第一章 総論		
第一節 中心の本体論	一〇〇	
第二節 消極的本体論	一一〇	
第二節 各宗派に於ける消極論一致の証明	一二〇	
第三節 積極的本体論	一二一	
第四節 積極的不分説	一二六	

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第五節 積極的二分説	二三二
第六節 積極的三分説	二三四
第三章 外観的現象論	二一九
第四章 中心的本体と外観的現象の異同論	二二三
第五章 向外的出の法則を論ず	二二五
第一節 総論	二三五
第二節 出門第一例（分派法）	三七
第三節 出門第二例（郤來法）	三九
第四節 出門第三例（仮設法）	三〇
第六章 向内的入の法則を論ず	一三四
第一節 総論	二三四
第二節 入門第一例（合同法）	三六
第三節 入門第二例（向上法）	三七
第四節 入門第三例（進行法）	三九
第七章 結論	一四一
余論	一四六
第一章 积迦に対する鄙見	一四六

SAMPLE
Shoshi-Shinsut.com

仏教統一論 第二編 原理論

第二章 仏身に対する鄙見	一四九
第三章 大乗仏説に関する鄙見	一五三
第四章 信仰確立に関する鄙見	一五七
第五章 各宗合同に関する鄙見	一六〇

自序

二六八

再版の辞

二七一

凡例

二七三

序論

第一章 歴史的研究の必要	二七六
第二章 教理史研究の分類	二七九
第三章 教理史研究の方針	二八三
第四章 涅槃の語義及び異訛	二八六
第五章 涅槃と実在との異同	二九〇

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

仏教統一論 第三編 仏陀論

凡例

二五六

序論

二五四

第一章 宗教と教祖との関係	三〇〇
第二章 仏陀論発展の遠因	三〇五
第三章 仏陀論発展の近因	三一〇
第四章 仏陀論発展の側面	三一五
第五章 仏陀論発展の結果（その一）	三二〇
第六章 仏陀論発展の結果（その二）	三二八
第七章 帰結	三三三

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

本書について

- 一、本書は村上専精著『仏教統一論 第一編 大綱論』全文、『仏教統一論 第二編 原理論』序論、『仏教統一論 第三編 仏陀論』序論を一冊にまとめたものである。元本の刊行年と刊行所は次の通り。
- ・仏教統一論 第一編 大綱論 一九〇一年、金港堂書籍
 - ・仏教統一論 第二編 原理論 一九〇三年、金港堂書籍
 - ・仏教統一論 第三編 仏陀論 一九〇五年、金港堂書籍
- 一、『仏教統一論』は右記三編に第四編教系論と第五編実践論が続くと予告されたが、第四編が出ないままに第五編が刊行されたのは遙か後の一九二七年であった。『第一編』に説かれた大乗非仏説が問題となり真宗大谷派の僧籍を離脱せざるを得なくなつた村上専精と『仏教統一論』という連作（の構想とその「挫折」あるいは「変節」）がもつ思想史上の意味については、現今の仏教研究の第一人者末木文美士氏の著書『明治思想家論（近代日本の思想・再考Ⅰ）』（二〇〇四年、トランスピュー刊）第四章「講壇仏教学の成立——村上専精」に論じられているので併説されたい。
- 一、本書における表記は左記の要領にて現代化した。
- 一、新漢字・新仮名遣いで表記した。別体扱いの字は原則として標準体に置き換えずそのまま表記したが（例、咒／呪、地の文中の同じ語において標準体と別体の表記が混在している場合には標準体での表記に統一した（例、迦毘羅衛／迦毘羅衛、俟つ／俟つ）。また、常用性の高い字の場合、地の文中においては別体を用いず標準体で表記したものがある（例、氷／冰、決／決）。
- 一、送り仮名と句読点を加減按配し、濁点を適宜補つた。補うべき送り仮名が幾とおりかかる場合、送り仮名がそのいずれであっても語義が同じならば（文体と読みやすさを勘案して）いずれかよさそうなものを選んで補つた（例、大に→大いに／大きに、却て→却つて／却りて、置て→、置いて／置きて）。
- 一、読み仮名ルビを適宜附加した（元本にあるルビは片仮名表記である）。読みが幾とおりかかる場合には、

一般的あるいは文脈上ふさわしいかと思われる読みを便宜的に選んで附加した（例、発る→おこる／あらわる、焉んぞ・奚ぞ→いづくんぞ／なんぞ、云爾→しかいう／うんじ）。

一、踊り字（繰り返し記号）は「々」のみを使用した。少数例ながら地の文において「一一」のような表記の箇所があるが、これは「一々」のように表記した。

一、元本において二行割の体裁で記されている補記は「」で括って表記した。

一、本書刊行所による註記は（）括りの二行割註の体裁で挿入した。正誤を判断しかねる記述について、原文のままの意で記す「ママ」のルビ書きは（）で括り（ママ）と記した。

一、元本には読点として黒ごま読点と白ごま読点が使用されているが、白ごま読点はその使用状況に鑑み中黒点に置き換えて表記した（元本に中黒点は使われていない）。

一、現今一般に漢字表記が避けられているもの、あるいは難読扱いとなつたと考えられるものは平仮名表記に置き換えた。置き換えたものは五十音順に次の通り。送り仮名と活用語尾は代表例のみを示す。（なお、疑問をあらわす助詞として使われている「乎」と「歟」については便宜的処理として「か」の読みで統一的に置き換えた）。嗟呼（ああ）、嗟吁（ああ）、亞細亞（アジア）、雖も（いえども）、聊（いささか）、孰れ（いずれ）、苟も（いやしくも）、愈々（いよいよ）、況や（いわんや）、印度（インド）、以為らく（おもえらく）、凡そ（およそ）、是の如し（かくの如し）、斯の如し（かくの如し）、此の如し（かくの如し）、迦湿弥羅（カシミール）、嘗て（かつて）、曾て（かつて）、希臘（ギリシャ）、基督（キリスト）、此（ここ）、爰（ここ）、是（ここ）、于茲（ここにおいて）、悉く（ことごとく）、尽く（ことごとく）、斯の（この）、此の（この）、此れ（これ）、是れ（これ）、之れ（これ）、屢々（しばしば）、暹羅（シャム）、已に（すでに）、乃ち（すなわち）、錫蘭（セイロン）、抑も（そもそも）、其（それ）、夫れ（それ）、啻（ただ）、忽ち（たちまち）、縱い（たとい）、縱令（たとい）、仮令（たとい）、倩々（つらつら）、于時（時において）、猶お（なお）、尚お（なお）、為す（なす）、并び（ならび）、為る（なる）、窃か（ひそか）、緬甸（ビルマ）、洵に（まことに）、亦（また）、併（まま）、寧（むしろ）、若し（もし）、齋す（もたらす）、固より（もとより）、稍々（やや）、動も（ややも）、猶太（ユダヤ）

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

仏教統一論

第一編大綱論全文

第二編原理論序論

第三編仏陀論序論

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
仏教統一論 第一編 大綱論
Shoshi-Shinsui.com

緒 言

余、去ぬる明治二十二年四月、時勢に感ずる所あり、東京市神田区今川小路に於て仏教講話所を開き、毎週二回青年輩の為めに講義及び説教をなし、又毎月一回「仏教講話集」を発刊し、以て通信布教を試む。然るに翌二十三年八月に至り、その講話所を一時閉じざるを得ざる事情に遭遇せり。その時に当り右の講話集を以て廣く公衆に告ぐることありき。その言に曰く、今や世の青年輩に対し仏教の講義をなさんとするには、普通文を以て成る新著述の必要を感じること最も切なり。已れ不敏なるも、敢えてこの任に当り、一大著述をなし、以て自身布教の根本主義を一定せんと。これ當時仏教講話所を閉ざるに当り、将来の方針を予告せし条件の一なりき。

爾來物換わり星移りて、年を経ることここにおいて十有二、然るに未だ当時の予告をして、実現せしむるに至らざるは、余の公衆に対し深く慚愧する所なり。但し今日なお当時の予告をして実現せしむるに至らざるものは、その後、学校管理の職を奉ぜざるを得ざる事情あると、又傍ら仏教の歴史的研究に従事することありしに由る。余かつておもえらく、近來我が国に歐洲の学風を伝うるや、一として歴史的に研究せざるものあることなし、然るに仏教徒にして仏教を研究するものを見るに、歴史眼を有する者あることなし。隨いて過去に対しては迷信の淵に陥り、未来に向かっては布教の方針を過つものなしとせず、豈に大なる欠点ならずやと。こ

れに依りて自ら史学の素養なきにも係わらず、明治二十五年以降、二、三子と共に仏教史の研究に従事し、或いは雑誌「仏教史林」に、或いは著書「日本仏教史綱及び和漢仏教年契」に、いささか研究の結果を報道すると共に、また傍ら時の仏教界に向かい忠告するに、歴史研究の必要を以てすることありき。これ二十二年の予告をして、今日まで空文ならしめたる重なる事情なりとす。

然るに社会進歩の形成は、一にして止まらず、他に又研究の必要を感じしむるものあり。何ぞや、曰く仏教各宗の比較研究これなり。そもそも近世歐洲に於ける比較宗教学の趨勢は、すでに我が国に到来しぬ。而して日本現今の仏教界を見るに、その教理は四分五裂するも、誰ありてこれを統一せんとする者なし。各宗は互いに開牆の状あるも、一人のこれが調和を講ずる者なし。故に比較宗教学の潮流を聞くと共に、余をしてその必要を感じしめたるものは、仏教各宗の比較研究なりき。これに依りて、余は去ぬる明治三十一年已後、いささか研究の方針を一変したり。即ち歴史研究としては、社会現象の事実史よりも、むしろ思想発達の教理史に注意し、教理研究としては、宗派的部分の研究よりも、むしろ宗派の比較研究よりして、統一的合同調和に尽瘁することとなしぬ。爾來この方針をして益々進ましめ、これを遂行し、以て明治二十二年の予告に報いんとすることに精神一決したり。而して今やその第一巻を公にするに至りしは、十有二年前の宿志の一端をこれに満足すと謂うべきも、これが完結を思えば、前途夕陽斜なるも道なお遠しの歎なきにあらず。然れども、本論は余畢生の願望として、心ひそかに仏陀に誓い、これが完結を企図して止まらざるものなり。伏して請う十方三世の諸仏よ、余の心を知ろしめし、余の志を助けたまえ。

本論は既にかくの如き由来あるものなれば、その研究の方法また旧来仏教徒の攷究法と大いに趣きを異にする。旧来仏教徒の攷究を見るに、先づ自己の依る宗派を定め、初めより自家の説は真にして動かすべからざるもの

となし、只これを説明するにあらざれば、これが弁護の労を取るを以て孜究となす。こは独り仏教徒に限らず、およそ宗教家の慣例として、彼は他家の故に非真理なり、排すべく、これは自家の故に真理なり、護るべしと云う態度を取り、真理非真理の判断は、一に自家と他家とを以てせんとする傾向なきにあらず。その甚だしきに至りては、自ら信ぜざる事をも、自家の説なれば已れこれを信ずるが如き言文を以て装わんとする者なきにあらず。かくの如きは余の断じて学ぶ能わざる所なり。余のひそかに学ばんとする所は、婆敷盤豆氏の『俱舍論』に於ける見識にあらざれば、訶梨跋摩氏の『成実論』に於ける態度なり。宗派心を以て、弁護的解釈の労を取ることは、独り余の快となざるのみならず、およそ学者として、これをなすに忍びざる所なり。眞理に對すればこれをなして恥じざる者、恐らくはあるべからず。

これに依りて、余は元來真宗の徒なるも、今や真宗を研究せんとするにあらず、又禪宗を孜究せんとするにあらず、又真言・天台、もしくは華嚴・法相等を学ばんとする者にあらず、余は仏教を研究せんとする者なり。余本論研究の眼中には宗派あることなし。余の眼中既に宗派なければ、甲宗の説なるが故に彼を排し、乙宗の説なるが故にこれを護ると云うが如き考えは、毫髪もあることなし。およそ研究なるものは、箇人的私情を眞理に貢献し、己れ無私公平の態度を以て向かうものならずんばあるべからず。然らざれば研究と云うべきものにあらざるなり。故に余はたといキリスト教の説なるも敢えて排すべからざるものとなす。いわんや仏教中の異宗異派の説に於てをや。

『法華經』に曰く、俗間經書治世語言資生業等皆順正法と、『同玄義』に曰く、資生業皆是成仏道と。これに依りてこれを觀るに、大乗の仏教眼を有する者は世俗の政治・法律・經濟・衛生・殖產・興業等の社会的実務も、所謂真如実相の妙用なれば、則ち仏教の根本原理の發表せし光明と見ざるべからず。又物理・化学・動

物・植物・生理・天文・地質等の各科学及びこれが大原理を究めんとする哲学も、所謂眞如実相の研究なれば、則ち仏教の第一義諦の秘密を開き來たるものと謂わざるを得ず。果して然らば、キリスト教の如きはもとより排すべきものにあらず、彼も我が大乘仏教海の或る点を取りて、人生を救済するものなれば、或る点までは、吾人提携する所なくんばあるべからず。キリスト教尚以て排すべからざれば、仏教中の宗派中に於て、焉んぞ排すべきものあらん。大小權実顯密教禪聖淨の各宗各派は、一も排すべきものにあらず、皆ことごとく合せ取りて以て一丸となすべきものなり。

空海師曰く、文隨執見隱義逐機根現と。又曰く釈教漸東夏自微至著と。およそ社会の現象何者か人智に関らざるものあらん。而して人智は時に隨い処に応じ、漸を以て大に変更するものなり。故に學術も宗教も処を替え時を殊にするに隨い、漸く開展し來たることは必然にして、同一時に汎百の現象を見ることは蓋し稀なりとす。果して然れば異状百端なる仏教も、皆ことごとく同一時の現象にはあらざるべし。恐らくは漸く開展せしものならん。そもそも仏教はすでに二千五百歳の長日月を経て、その伝播は東亜の半球に及びし大歴史を有するものなり。

然ればこの時この処を経るに従いて大なる變化開展なきを得ず。もしそれ初発の仏教を以て現今の仏教を見れば、同一の教系線を通過し來たるものとは、思われざるものあらん。現今之如き仏教が、二千五百年前のインドにありて行われしものと思う者あらば、愚もまた甚しと云わざるを得ず。かつて法顯法師インドに至り、彼の僧中に行わるる戒律儀式が支那に伝えしものと異なるを見て大に痛歎せられしが如きは、實に好適例なりと云わざるを得ず。これに依りて仏教を研究するに當り、必須少くべからざるものは歴史眼なりとす。もしそれ歴史眼を以て教理開展の系統を考うれば、種々分裂せし各宗の教理は、唯一理想の開展にして、各宗は根本

的にその教祖（釈迦）を一にすると共に、又その教理（真如）を一にすることを知るべし。請う本編本論第一第二を見よ。

この歴史眼に又比較眼を雜え、四分五裂の仏教理想を比較研究すれば如何、大小権実顯密教禪聖淨と分裂し、殆んど調和の望みなきが如く見ゆるものの中に於て、歴史的に系統あると共に、又理想的系統の条然たるものあるを見る。理想的系統の条然たるものあるを見ると共に、仏教百千に分かるも、本と一理の開展にして只そこの写象を殊にするものたるを知る。例えば孤月の万水に影を宿すに似たるものあり、これに依りて、又百千の仏教が期せずして融合すべきことは、恰も万川の大海に入りて同一鹹味かんみとなるに似たるものあり。請う本論第三を見よ。

余かくの如く歴史的に考え、又比較的に考うるに、仏教は如何に分裂し、如何に衝突するも、又融和すべきものなることを知る。余はこれを知ると共に、大いに仏教各宗の合同を企図する者なり。もしそれ旧来の如く解剖的仏教を固執し、各宗互いに自家に偏して他家を排せんか、仏教中完全の宗教なしと謂わざるを得ず。もしそれここに旧慣を去り、偏執を離れて、各宗互いにその長を取り短を去らんか、即ち仏教中に花あり月あり楼台ありと謂うべき、完全の宗教を見るに至らん。故に余は大いに仏教各宗の合同論を主張せんとす。余が大いに仏教各宗の合同論を主張せんとするものは、その信念を統一せんが為めなり。たとい統一することを得ざるも、その信念を互いに融和し、互いに接近せしめて、衝突すること無からしめんとするに在り。然れども、本論に対し或る方面より多少の批難あるべし。請う攻むる者はこれを攻めよ、擊つ者はこれを擊てよ。たとい四面楚歌の声を聴くに至るも、余が多年研究の結果として得たる断案は即ち余の信仰なり。既に余の信仰なれば、外部の攻撃に依りて容易に動くものにあらざるなり。仲尼曰く知我者其惟春秋乎、罪我者其惟春秋乎と。余曰

く知我者其惟統一論乎、罪我者其惟統一論乎と。

いささか研究の始末を陳し、以て緒言となす。

明治三十四年五月

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

著者識

再版の辞

予はもと真宗大谷派の僧侶たりしにも係わらず、爾來、内仏教の現況に鑑み、外社会の趨勢に徴し、少しく研究するところありて、漸く去る八月本編を上梓するの運びに至れり。然るに世の無学不識なる者、本編を以て、或いは仏教を非議すとなし、或いは真宗を破壊すとなし、その言論や、喧々擾々、以て揣摩憶測の説を濫りにし、眞に識者をして彼等が襟度の狭小なるを嘆ぜしめたると同時に、如何に彼等が固隨偏見に沈淪せるかを驚かしめたり。次いで予去る十月二十五日、書を真宗大谷派本山に致して、真宗大谷派の僧籍を脱せり。すなわちいさかその来由の概略を陳じ、また併せて将来の方針を叙し、以て辱知諸彦に告白するところありき。されば今や予は既に真宗大谷派の一小天地を脱却して派外に超出し、大いに自由討究の好機を得たり。豈に身心共に自ら広胖なるを覚ゆるを禁ぜんとするも得べ肯んや。

本論はただ仏教在來の学風の主として訓詁的一面に傾斜するにあらざれば宗派的一面に偏向せるを打破し去りて、至公至正に達意的批評的及び比較的研究を試み、特に歴史的研究に着目し、以て大いに仏教の真髓を發揚せんとするに在り。従いてその研鑽討尋の必然的結果として、或いは釈迦を以て人間なりとし、或いは仏陀を以て釈迦一仏なりとし、或いは大乘仏教を以て非仏説なるも仏意なりと断ずるに至る、豈に偶然ならんや。蓋し釈迦を以て人間なりと論定せるは、科学的研究の自然的結論にして、彼を以て超絶的人間となすに至りて

は、その愚や及ぶべからざるなり。但し仏陀を以て釈迦一仏なりと論定せるは、円仁・安然の二氏に基き、いささか考うるところなきにあらず。又大乗仏教を以て非仏説なるも仏意なりと論定せるは、最澄・空海の二氏に就きて、自らまた造詣するところなきにあらざるなり。世の妄評家、大早計にも未だ著者の精神の如何を知悉せずして是非曲直するが如きは、眞に謬見の甚しきものと謂うべし。予は後編に至り、これ等難問題に対する研究を公にすることあるべし。

本編発刊後、日なお浅きに係わらず、今や再版するに臨みて、本編初版の凡例を一読するに、少しく重複の嫌なき能わず。依りてここにその後二条を削除し、更に別に凡例第六条以下の五条を追加し、以て再版の辞となすと云爾。

明治三十四年十一月一日

著者識

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.Com

凡例

(一) 差別を知らざる平等は悪平等にして、平等を知らざる差別は悪差別なり。これに依りて、本論は各宗相互間に於て、平等の理ある所以を知らざる悪差別の偏見に対し、各宗は差別と同時に平等なる所以を、根本的に放究するにあり。

(二) 放究の本旨これにあるが故に、差別的宗派心の深き人にして、本論を披くあれば、多少批難せざるを得ざるものあらん。蓋し差別の方面を立脚地となす者と、平等の方面を立脚地となす者と、その見解に於て多少の衝突あるは、理数の然らしむる所なれば、その批難は余がもとより期する所なり。

(三) 本論は余が東京帝国大学に於ける数回の講義なり。然れども、今や幾多の修正を加えて、世に発表するに至りしものなれば、大学に於ける数回の講義に比するに、多少の変更あるはもとより弁を俟たず。

(四) 本論は、全部五巻脱稿の時を俟ちて刊行する予定なりしも、全部脱稿の日はなお遠ければ、今や先ずその第一巻を刊行することとなしぬ。故に本編の如き或いは全部脱稿の日に至れば、多少訂正せざるを得ざるもの無きにしも非るべし。故に本編はなお未定稿に属せざるを得ず。然れども論旨の断案に於ては、変更すべきものなしと、自ら信じて疑わざるなり。

(五) 余は天性文才に乏しく、また文章を学ばざる者なり。而も余の癖として、他に潤文を請うことを欲せざる

なり。故に本編の如き、文章の拙にして又野なることは、他に類を見るもの稀ならん。これ余が読者に対し
大いに慚愧する所なり。

(六) 本論著述の精神いすれにあるかは、緒言及び序論に就てこれを知れ。著者は暫く身を門外に処し、一般の
学術思想と同様の態度を以て、仏教を研究せんとするものなれば、その論ずる所、各宗の教格を多少破壊す
るものなしとせず。蓋けだしこれ止むを得ざる事情なりとす。

(七) 本編中に、他力教の本尊なる阿弥陀如来を以て、理想的に解釈せしものあれば、他力教を奉ずる人より、
或いは批難あるべし。されど、統一論としては止むを得ざる事情なり。蓋けだし後編に至ればこれに依りて却つ
て弥陀の真価の顯揚せらるるもの、或いはなきにあらざるべし。

(八) 本編余論に於て、釈迦は人間なりとし、而も仏陀はこの人間なる釈迦の外にあることなしと断言せしもの
は、歴史眼より来たる論断なり。教理眼を離れ、歴史眼を以て見る時は、斯く云わざるを得ざるものとす。

(九) 本編余論の大乗仏説論に就き、また頗る批難あるべしと信ず。されど一般の学術思想と同様の態度を取り、
殊に歴史眼に重きを置きて見る時は、斯く云わざるを得ず。但し余は非仏説と言うも非仏意と言う者にあら
ず。然れども第三編に至らざればこれを尽すこと能はず。

(十) 本編の特色とする所は、一に宗派心を離ると、一に歴史思想を以てするにあり。故に本編は宗派心強く、
また歴史思想に乏しき人の見るべきものにあらず。

明治三十四年十月再版の時

著者誌

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

序

論

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第一章 研究の困難

科学に哲学に宗教に、吾人が研究すべき古今の人文史、その數幾百種あるを知らず。然れども、余は科学を研究せんとする者にあらず、哲学を研究せんとする者にあらず、宗教を研究せんとする者なり。然るにその宗教又唯一種に限らず、古今東洋に興り又西洋に行われしものその數幾百種の多きに達す。然れども、古来伝播の歴史に就てこれを考へ、又現今信徒の多少に就てこれを考へ、又宗教その者の内容に就てこれを考へるに、世界宗教の第一位を占むるものはそれ仏教ならん。故に余將に仏教を研究せんとす。

然るに、その仏教を研究せんとするに就て、困難たるべきもの実に数条あり、中に於て今二種の難件を挙げん。第一、書籍に就て困難を感じ、第二、教理に就て困難を感じ。第一書籍に就て困難を感じる所以は、世界の人文史中、仏教の如く書籍に富めるもの恐らくはあるべからず。仏教には所謂藏經なるもの四種あり、一に漢字藏經、二に満字藏經、三に蒙古藏經、四に西藏藏經これなり。この外パーリ語を以て成る南方仏教の所伝を加うれば、五種の文字を以て成る五類の藏經ありと謂うべし。更に又サンスクリット語を以て成れるものあり。かくの如く異様の文字を以て成り、而もその数汗牛充棟もただならざるものあるに於ては、誰か一人にしてこれを能く研究し尽す者あらん。而して日本に今応用せらるものは、四藏經の中にて漢字藏經なり。然るにその漢字藏經即ち大日本校訂の縮刷藏經に編入するものは、総て八千五百三十四巻あり。この外に續藏經あり又續藏

・經あり。更に又漢字を以て成るも、未だ漢字の三藏經の中に編入せられざるもの、幾千あるを知らず、恐らくは万を以て數うべきものあらん。而してこの漢字を以て成るもの分類するに、インドの選述にしてインド思想の混入するものあり、支那の選述にして支那思想の混入するものあり、日本の選述にして日本思想の混入するものあり。而も前後幾千歳を経過する間に於て、その時を異にし、その處を異にし、その人を異にして成りしものなれば、翻訳に就て論ずるも、著作に就て論ずるも、文体の一様ならざること最も甚し。故に唯漢字を以て成るものに限るも、一人の容易に研究し尽すべきものにあらざるなり。實に岸頭に立ちて、杳然たる太平洋を眺望するに似たるものあるは仏教關係の典籍にして、これその研究に困難を感じる第一条件なりとす。

第二に教理に就て困難を感じとは、かくの如く仏教の典籍が、墨々として山をなすが如くあるものは、その中に説く所の教理の最も複雑を徵するに足る。既にその時を異にし、その處を異にし、又その人を異にして、而もかくの如き多数の典籍あるに至りしものは、種々錯雜の異論あるに依ると云わざるを得ず。異論なきものにしてかくの如き饒多なる書籍を出だすことは、万あるべからず。故に仏教が書籍に最も富めるは、即ち異説に最も富めることを証明すと謂いて可ならん。もしそれ委しくこれを尋ぬるときは、異説無限なりと謂うべし。故に仏法に無量の門ありと説き、又八万四千の法門ありと称し來たる。然れども要を取りてこれを云わば、大小権実頤密教禪聖淨と分類する中に攝まらざるものなきなり。^{（註）}支那に分裂せし十三宗の如き、日本に分裂せし十四宗の如き、またこの外なる者にあらず。今その大小権実頤密教禪聖淨と分裂せし宗派の異同を見るに、或いは消極的虚無論なるが如く見ゆるものあり、或いは積極的實在論なるが如く見ゆるものあり、又或いは理想中心説と謂つべきものあれば、或いは擬人的仏陀中心説と謂つべきものあり、隨いて自力主義を取るものあり、又他力主義を取る者ありて、もし甲に依りて乙を見れば、乙は非仏教の邪説と云わざるを得ざるが如く、又乙に

依りて甲を見れば、甲は非仏教の邪説と云わざるを得ざるが如き反対的大衝突あるものは、仏教界内部の状況なりとす。これを例うるに、國乱れて群雄処々に割拠するも、一人の統一者を得ざるが為め、人の依るべきなきが如く、反対又反対、衝突又衝突ありて、一見支離滅裂せしものの如く見ゆるは現今仏教界なり。かくの如き乱雜なる仏教中に入りて、これを能く整理せんとすることは、實に容易の業にあらざるなり、故に教理の複雑を以て研究に困難を感じる第二条件なりとす。

然れども、これを整理するは吾人の任務なりとするに於ては、如何なる方法に依り、如何なる方針を立て、如何なる順序を設けて、これが研究の目的を達すべきか、これ吾人が仏教の研究に着手せんとするに就て、先づ起らざるを得ざる疑問なりとす。請う後章を見よ。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第二章 研究の分類

前述の如く、種々困難の事情あるにも係わらず、これを研究せんとするには、先ず研究の種類を分かちて、各自これを分担する方法を講ずるに如かざるなり。例せば、地理・歴史・天文・地質・動物・植物・生理・心理と云う如く、その部類を分かちて放究する科学あれば、又これ等各科目の研究を統合し、宇宙万有の第一義を発見せんとする哲学あるが如く、仏教もこれを研究せんとするには、その部類を分かちて、各自に分担する方法を講ぜざるべからず。古来仏教を講習する者の風習として、学問といえどただ書物の文面上に関わる放究にて事足れりとする傾きあり。これに由りて、仏教の真意の発見せられざるのみならず、却ってこれが為めに、仏教の真意を覆蔽することなしとせず。文字の末に拘らるる弊害また甚しこと云わざるを得ず。故に前章縷述の如き困難の事情あるのみならず、斯く博大にして又漠然たる佛教界に向かい、その真偽を考決し、その是非を判断せんとするには、必ず先ず研究の種類を分かち、その範囲を定めざるべからず。これ研究の進路を開かんとするに就き第一着の要件なりとす。然るにその分類すべきもの、殆んど際限なきが如く多々あるべしといえども、要を提れば、大略左の如き分類的放究の必要あるべきなり。

第一類 註釈的研究

第二類 達意的研究

第三類 批評的研究

第四類 歴史的研究

第五類 比較的研究

第一類は經典の講読なり。近來は古書の訓詁的講義を無用視する者なきにあらず。然れどもそれは過ぎて及ばざる者なり。仏教に局らず、總べて古代のものを研究せんとするには、古書に依りて知らざるを得ず。古書に依りて知らんとするものは、古書を研究せざるを得ず。故に或いは『俱含論』を講読し、或いは『成唯識論』を講読すと云う如き、古來の註釈的研究は、今日といえども依然必要なり。決して排すべきものにあらず。但し古來の如く學問は唯この一法に限ると思う如き頑迷は、断然除却せざるべからず。第二類は各宗各派の教理及び組織法に対する達意的研究なり。これは第一類の中に籠るといえども、第一類の中よりこの第二類を別に開かざるべきは、人やもすれば、心を文章字句の間に奪われ、幾多の歲月を重ね、終日終夜、力を書の講読に尽すも、未だ各宗各派の教理の真髓を得ざるのみならず、或いはその書の真意をも得ることなくして終る者なしとせず。これに由りて第一類の外に第二類を開き、天台宗とは何ぞや、華嚴宗とは何ぞやと云う如き、問題解答の研究を専一となすものなくんばあるべからず。これ仏教を取りては最も重要な問題なり、且つそれこの問題たるや、研究の箇条頗る多ければ、更にこの中に於て數十種の問題を生じ、隨いて幾多研究の分類あるべきなり。第三類は、第一類と第二類の研究に就て、無くんばあるべからざる研究法なるも、古來この研究法を應用せし者殆んど稀なりとす。然るにこの研究法を開かざるべきは、真を真となし偽を偽となす能わざるなり。即ち迷信妄信なるもの多くはこの研究法なきより生ず。これに依りて第一類の註釈的研究をなす者は、書ことごとく信ずれば書無きに如かずと云う見識を以て向かわざるべからず。古書はその來歴、その文字、その

義理に就て、真偽如何の判定を下すこと最も必要なりとす。又第二類の宗派的に各教理の研究をなすに於て、これをそのままことごとく信することは、吾人思想の許さざる所なり。甲乙彼此の間に於て、多少批評的眼孔を以て向かわざれば、吾人甲乙彼此の説を同時に齊しく信忍する能わざるなり。且つそれ仏教は宗教なるも、研究のときは学問の法則に依らざるを得ず。学問の法則に依り、この繁雜限りなき仏教に向かうときは、勢い批評的眼孔を以て批評的研究を試みざるを得ざるものあり。故にこれを開きて一種の研究法となす。第四類は第三類と共に最も必要な研究法にして、二千五百年間に於ける教理の変遷より教団の変遷、ならびに伝播の地理、及び偉人に関する研究の如き、また以て重要な研究にして、而も洪博なる問題なるが故に、更にこの中に於て種々の問題を生ずれば、隨いて幾多の分類なるべからず。第五類は仏教と外教の比較研究なり。仏教中にはインド婆羅門教の混入するものあり、支那孔老の説の混入するものあり。たといその事なしとするも、説の相似たるものあることは弁を俟たず。加之、歐米に蔓延する所の各哲学各宗教に対し、比較研究することは現今頗る重要な問題にして、又その比較研究すべきもの甚だ多きゆえ、更にこの中に於て數十種の分類なるべからず。

かくの如く局部を限りて研究するものを、仮りに部分的研究とせんか、なおこの外に部分的研究を網羅するものなくんばあるべからず、換言すれば、上陳の部分的研究を科学に似たるものとすれば、この外に哲学に似たる研究法なくんばあるべからず。即ち仏教各部の全系を考え、理想の統一を発見する研究法なくんばあるべからず。余これを統一的研究法と云わんとす。つらづら現今の仏教界を見るに、仏教は四分五裂し、支離滅裂せんとする状況を呈すと云わざるを得ざるものあり。試みに甲宗派の説と、乙宗派の説と、丙宗派の説と、丁宗派の説を一堂に集めて比較傍聴せよ、只説に径庭あるのみならず、その反対することの最も甚しきを見る。即

ち各宗いづれも自家獨得の意を以て、眞理は我れにあり他は皆非眞理なり、眞正の仏教を求めるとする者は我が門に來たれ、他は皆非仏教にあらざれば、擬仏教なりと云わんとする、自讚毀他の意を含まざるものあることなし。その状況、恰も國家統一の君主なく、群雄処々に割拠し、互いに敵視するに似たるものあり。故に初めて仏教の門に入らんとする者にして、たちまちに發おこるべきものは、かくの如く反対的衝突あるもの、いづれか眞正の仏教なるか。もしその一を正とすれば他は皆不正ならざるべからず、即ちその一を仏教とすれば、他は皆非仏教ならざるべからず。もしいづれも眞正の仏教なりとすれば、何故に甲説乙論の衝突あるかの疑問これなり。この疑問と共に、自ら岐路に彷徨してその依るところに迷惑せざる者殆んど稀なりとす。これに依りて、この疑問に応答すべき研究は、刻下の急務なりと云わざるを得ず。而してこの疑問に応答する研究は、即ち統一的研究法なりとす。故にこの統一的研究は唯學問として必要なるのみならず、又布教策としてその根拠を明確に一定するに於て最も必要なりと信ず。唯布教策として必要なるのみならず、又各宗派の和衷協同を計るに於て、根本的に必要なり。故に余敢えてこの研究の新路を開ひらかんとす。

但しかくの如く部分的研究と統一的研究と、研究の部類を分かちしものは、古代にその例なきにあらず。即ち大日本校訂の大藏經を見よ。宗教論・釈經論の分類あり、所謂宗教論を或いは通申論と称し、所謂釈經論を或いは別申論と称す。別申論は竜樹の『智度論』、世親の『十地論』の如く、一部の經卷の註釈なり。通申論は竜樹の『中觀論』、馬鳴の『起信論』の如く、仏教總部に關わる概括的達意論なり。余の統一的研究は、即ちこの概括的達意論に相当するものなり。然れば研究法を大いに二分せしものは、千古にその例ありと謂うべし。余豈に敢えて奇を好む者ならんや。

第三章 研究の用意

かくの如く研究の種類を大に二分せし中に於て、余は統一的研究を試みんとする者なり。統一的研究を試みんとするには、如何なる用意を以て進行すべきか、これ先きに致研究せざるべからざる先決問題なりとす。もしそれ研究の用意充分ならんか、隨いて研究の結果その正鵠を得べきも、研究の用意充分ならざれば、研究の結果正鵠を得ず、却つて誤謬を以て莊嚴するが如きものなしとせず。故に先ず如何なる用意を以て進行すべきかを考えざるべからず。余は統一的研究の用意として、少なくも五種の研究眼の必要を感じり。即ち左の如し。

- 第一 教理眼
- 第二 論理眼
- 第三 歴史眼
- 第四 比較眼
- 第五 批評眼

それ仏教は他の学術に異なりて宗教なり。故にその説明の如き、たとい理論主義に似たるものあるも、総べて実行主義なり。実行主義よりして諸般の分類をなし、又その説明を下すゆえ、理論主義を以て成る他の学術と同一視すべからざるもの甚だ多し。且つそれ仏教の經典は、千有余歳を経過する間に於て、漸く翻訳せられ、

又選述せられしものなるゆえ、翻訳の一定せざるもの多し。又教理種々に分裂し、隨いて各宗その門を異にするがゆえ、その語は同じてその意の別なるものあり、その意は同じてその語の別なるものあり。故に教理眼を以てせざれば、解すべからざるもの甚だ多し。教理眼の用意なく、一に文字に依りて解釈せんとするに於ては、その正鵠を過つもの少なからず。これを以て第一に用意すべきものは教理眼なりとす。即ち部分的研究法の中に於ける、第一類第二類の如きは、今この統一的研究をなすに於て用意せざるべからざる材料なりとす。

且つそれ旧来仏教者にして仏教を研究する者を觀るに、その多数は論理主義ならずして引文主義なり。古代因明なる論理学に於て、現量・比量・聖教量の三量を立てて、事を判断する標準となし來たりしを、陳那氏出でてこれを改正し、現量・比量の二となし、聖教量はこれを現比の二量に含ましむることとなせしにも係わらず、従来仏教者の仏教を講ずる者を觀るに、徒らに經典の文句を多々陳列し、以て事を決せんとする習慣を造り來たる。然れどもかくの如き旧慣は今や陳腐に属し、今人の学ぶべからざる所なり。今日仏教を研究せんとする者は、陳那氏、因明改作の意を服膺して、引文的聖教量に依らず、宜しく論理的に現量比量を應用すべきなり。それ仏教は宗教なり、宗教は他の學術に異なり、説明以下に止まるものにあらず、その根拠を高く説明以上の處に置きて成立するものなり。故に科學的に実驗試験を以て説明し尽すべきものにあらず、演繹的論理法に依りて成立するものなり。故に帰納的論理法に依りて充分に説明し得べきものにあらず。然れども、今や引文的聖教量に托する如き古來の愚を学ぶことを廃し、推理思想に依り、帰納的論理法を以て説明し得べきものは帰納的論理の精神を以て研究し、帰納論理を以てすべからざる所は演繹論理の精神を以て研究せざるべきだ。然らざるものは、人これを肯わざるのみならず、自らもまた肯い得ざるものなり。故に論理眼また以てこの統一的研究に必要な材料なりとす。

右論理眼の必要と共に歴史眼の必要あり。およそ宇宙に生存するものを見るに、多少の時間を経るものにして現象の変化せざるものあることなし。これを大にして宇宙の全世界に徴するも、これを小にして宇宙の部分に徴するも、一として変化せざるものあることなきなり。植物に就て見るも、動物に就て見るも、人類に就て見るも、又その人類社会の上に行わるる、政治・風俗・文学・宗教・技芸に就て見るも、皆ことごとく変化しつつ継続し來たるものなり。故に凡べて今時の現象は一も往時の現象にあらざるなり。今それ仏教はここにおいて二千幾百歳の長日月を経過し來たる、而もその長日月の経過中に、その国を転じ、その人を変じ、隨いてその思想を殊にし、その風俗を異にする中を通行し來たるものなり。然ればこの間に於て幾多の変動なるべからず。古より仏教は応病与薬の説なりと云う。果して然らば、古今歳月を隔つること二千幾百歳、東西山海を距ること幾万里、この間に於ける社会人心の変動は、實に驚くべきものあらん。この驚くべき変更ある社会人心に対し、その時を鑑み、その処に隨い、応病与薬の説を垂れ、教を布き來たりし仏教なれば、古今實に驚くべき変更くんばあるべからず。かくの如く他に稀なる長久の日月を継続し來たり、隨いて他に稀なる大変動ありし仏教を研究せんとするに於て、殊に必要なものは、前の部分的研究法の第四類に掲げし歴史的研究なりとす。故に彼を今この統一的研究をなすに於て用意せざるを得ざる一の材料に數えしなり。

右歴史眼の必要と共にまた以て比較眼の必要あり。およそ物唯一なれば、比較すべきものなきが故に、比較するに及ばざれども、二個已上複雜を重ねるに於ては、隨いて比較の必要を生ず。これを比較せざれば、双方共にその真相を得る能わざるなり。比較研究するところに於て、始めて双方の真相を得る。故に比較研究は、二個已上のものに對して、必然的に發する思想運用の自然法にして、又その真相を得るに於て、最も必要な研究法なりとす。且つそれ比較に由りて双方の真相を得るのみならず、比較に由りて更に第三の真理を發見するこ

とあるものなり。例えば水素と酸素の化合的作用に依りて、第三の水を得るが如きものなきにあらず。甲断と乙断に由りて第三の合断論を得るが如きは、即ち比較研究に由りて得たる結果なるものなり。而して仏教は異論又異論、分裂又分裂を重ね来たりて、今や教理の複雑なること、他にその例を見ざるに至る、かくの如き複雜なる仏教界に向かい、殊に統一的研究を試みんとするに於て最も必要なものは、部分的研究の第五類に依りて得たる比較眼なりと云わざるを得ず。實に前の歴史眼と今この比較眼は、時間と空間の両方に向かいて、一も欠くべからざる必須の双眼鏡なりとす。故にこれを統一的研究に必要な用意の一に數えしなり。

右比較眼の必要と共に又批評眼の必要あり。およそ學問研究の目的は疑問を判断するにあり、而して甲説乙説の異論囂々として最も混雜を極むる間に立ち、その是非曲直を判断し、疑問を氷解せんとするには、批評眼を以て向かわざるを得ず、批評は是非曲直を裁判するに於て必須の剣刃なりとす。今それ仏教は、甲論乙説の異論囂々として、教理の混雜甚しきものなり。かくの如き仏教界に向かい、殊に統一的研究を試みんとするには、是非曲直を判断せざるを得ず、是非曲直の判断をなさんとするには、批評眼を措て他に好き方術あることがなきなり。人或いは云わん、仏教は宗教の故に只信仰すべし、敢えて批評的研究をなすべからずと。然れども余を以て見るに、たとい宗教なるもこれを研究するに至りては、學問の法則に依らざるを得ず。故にインド以来の高僧諸師も、皆學問の法則に依りてこれを説明し來たりしなり。もしそれ學問の法則に依り、殊に統一的研究を遂行せんとするに於ては、この批評眼なかるべからず。統一的研究に於て、最も必要なものは、この批評眼なりとす。故に前の部分的研究の第三に數えしものを取り、今この統一的研究を遂ぐるに於て、最も必要なものの一に數えしなり。

已上統一的研究をなさんとするに、先ず用意せざるを得ざるもの五種を数う。然るに余輩不肖、未だこの用

意ある者にあらず、自らその用意なくして、而も己れ研究の緒に就かんとするものは、己れ人を欺くに似たり。然れども、又前に云う如く、統一的研究の急務なるを余何せん。故に余敢えてこの研究の途に上らんとする者なり。

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

第四章 研究の目的

かくの如く、用意の周到せざるにも係わらず、敢えて研究せんと欲する目的如何と云うに、既に統一的研究を試るにありとすれば、その目的は即ち仏教理想の合^ハ一致を計るにあること弁を俟たざるなり。或いは八万四千の法門ありと云い、或いは大小権実顯密教禪聖淨の部別ありと云うもの、即ち古來種々に分裂せし各宗各派、個々別々の觀あらしむる仏教は、元来不^ハ同一的性質のものか、又合同的性質のものか。いずれも皆仏教の名を冠むる已上は、その外面は不^ハ同一的性質のものたるが如く見ゆるも、その内容は合同的性質のものたらずんばあるべからず。およそ人は、その外面の不^ハ同一なるが如きを見て、その内容の合^ハ一致的性質の者たるを知る者稀なり。これに依りて、或いは仏教に入らんとするも、己れ四衢街頭に彷徨して、その依る所を決せざるが如き者なきにあらず。偶々その依る所を定め、信念あるが如く見ゆる者あるも、或いは信念の一致を欠き、又信念の鞏固ならざる虞なしとせず。即ち甲派の信者と乙派の信者と、相互間に於ける偏執的隔情は、實に驚くべきものありて、仏教界に於ける信念の一致を欠くもの実に甚しへと云わざるを得ず。偶々敵視の情なき者あれば、或いは自家の説に対して他家の説を疑い、或いは他家の説に対して自家の説を疑う者あり。故にその信念の鞏固ならざること恰も薄氷を履むに似たるものあり。かくの如きは共に信念と謂うべきものにあらず。余輩仏教に対する信念は彼此一致すべきものなりとす。たゞ、一致せざるも衝突すべきものにあらざることは確信

して疑わざるなり。或いは人あり、仏教の四分五裂は外面なるのみ、その内実は合同一致異色あることなしと云うことを、信じて疑わざる者あらん。然れども、元来合一的性質のものが、如何にして斯く分裂せしか。又斯く外形の異様なるものを、如何にして合同一致と見るべきかと問えば、未だ明答を与へし者あるを聞かず。故に余が統一的研究をなさんとする目的如何と問えば、支離滅裂せんとする仏教理想の合同的一致を知らしめんが為めなりと答へざるを得ず。仏教理想の合同一致を知らしむるは、即ち仏教に対する信念を一致せしめんが為めなり。たとい一致せしむるに至らざるも、偏執的隔情の衝突を融和するに至らん。

求那跋摩氏は、諸論各異端。修行理無二。偏執有是非。達者無違諍。〔梁高僧伝第三卷、又三論玄義〕と云う。蓋し格言なりき。これに依りて吉藏師は数々、大小乘教顕道無別の言を吐き、「大乗玄論、中論疏等」、雲門の文偃和尚はかつて、如何是一切時教の間に答えて、対一説と云い、「頽巖集、又三百則等」、圓悟和尚は、世尊三百余会。觀機逗教。応病与薬。万種千般説法。畢竟無二種語。〔碧巖集第九十五則〕と云い、凝然国師は、三乘一乘旨異。眞性理同。一姓五姓事別。実体如等。〔内典塵露章〕と云う。然れば則ち、古人に仏教理想一致を唱うる者少なからず、然れども、未だ理想一致の所以を明弁せし者なきなり。偶々これありとするも、今日の思想界に適応する説明を与えし者あるを聞かず。これ今日余輩が敢えて研究の任に当り、敢えて説明を試みんとする所なり。それ仏教理想は、分裂に分裂を重ねたる結果、今としては支離滅裂せんとする状況なきにあらざれども、元來同一的性質のものたり。元來同一的性質のものたる所以は、その内部に脈絡貫通の系統線あるに由りて知る。この内部に於ける脈絡貫通の系統線を発見し、これに依りて外面に種々様々の異色を呈する各派の仏教を一観すれば、反対の如く衝突の如く見ゆるものの中に於て、求那氏の理無二と説き、吉藏師の顕道無別と説き、雲門和尚の対一説と云い、圓悟和尚の無二種語と云い、凝然師の理同と云い、又如等といえる言の、虚ならざるを知るに至ら

ん。これを知るに至ると共に、従来四分五裂の如く見えし、各種の仏教を統合して、ここに円満なる一大仏教を組織するに至らん。ここに円満なる一大仏教を組織するに至れば、これと同時に吾人信念の衝突を避け、仏教界に於ける信念を悉皆統一するに至らん。豈に愉快の業ならずや、豈に愉快の業ならずや。

かくの如き統一的研究を前の部分的研究に比するに、大いにその趣きを異にするものあり。試みにこの統一的研究を前の部分的研究に比較せんか、封建時代に於ける、國家の政令・制度・風俗を見るに、地方異なれば、隨いて政令を異にし、制度を異にし、風俗を異にす。然れども、一人のこれを統一する者なきが如き状況あるものは部分的研究なり。又郡県時代に於ける国家の政令・制度・風俗を見るに、中央政府と地方政府の連絡關係の最密なるあるに由りて、たとい地方異なるも、同一の政令行なわれ、同一制度の下に人民を統御す。これに依りて異様の風俗も漸く同化するに至り、益々國家統一の美觀を増すが如きものあるは、統一的研究の長處なり。これに依りて部分的研究の一方に止まり、統一的研究に注意せざるときは、恰も封建時代にありて、國家の英雄、四方に割拠し、相互に敵視して、その釁^{きん}を占うが如き状況ありて、仏教各派間の敵情を融和すること能わざるなり。もしそれ統一的研究にして好結果を得る時は、恰も封建政治破れて郡県政治と成り、従来敵視反目の情深かりし群雄も、今や同一廟堂に会し、その心を一にして國務を執るに至り、隨いて大いに國家の美觀を増し來たるが如き状況あるに至らん。即ち仏教界に於て、自法愛染故。毘^び皆他人法。雖持戒行人。不免地獄苦「智度論」と認められし、偏見者を見ることなきに至らん。故にその結果として得る所の利益少々ならざるなり。かくの如き利益あるを知りつつ、豈にこれをなさざるべけんや、豈にこれをなさざるべけんや。

第五章 研究の順序

余かくの如き利益ありと認めしゆえ、今敢えてこれを遂行せんとするに、如何なる順序を立てて進行すべきか。その順序正しからざれば、労多くして効少なし。その順序正しければ労少なくして効多し。故に順序を定むること、また以て必要な条件なりとす。これに依りて予め研究の順序を考えざるべからず。今これを考るに、全論を五大部に分かち、左の順序に依りて研究の歩を進ましめんとす。

第一編 大綱論

第二編 原理論

第三編 仏陀論

第四編 教系論

第五編 実践論

統一的研究をして完結せしむるには、この五大部門を開かざるを得ず。この五大部門の研究終らざれば、前章云う所の目的を達すること能わざるなり。この五大部門の研究完結し、而も好結果を得る時は、即ち前章云う所の目的を達する時なり。故に事容易ならず、宜しく勉めずんばあるべからず。

研究の科を五段に分かち、大綱論を第一となすものは、何等の学問も、研究の初めに於て、その学科の概要

を提撕^{ていせき}すること最も必要なりとす。殊に仏教の如く洪博にして又繁雜なるものは、先ずその大綱要領を握ること、最も必要なりとす。故に『摩訶止觀』の初めの大意段に倣い、最初に仏教總部の大綱を論ぜんとす。而してその大綱論を又三段に分かち、第一を根底論と題して仏教總部の由りて興る根底を論定し、第二を教綱論と題し、その根底の上に成立する各種仏教の綱領を弁明し、第三を大系論と題し、統一的研究をなすに於て、最も必要な仏教全部の組織せられし系統線を明らかにせんとす。

かくの如く大綱論を三分し、その第一段に於て、仏教の根底を論定せんとするものは、他にあらず、仏教が四分五裂する如く見え、統一する能わざるもののが如く思わしむるものは、要するに、その立脚地なる根底を究めざるに由る。もしそれ仏教總部の由りて興る立脚地を究明すれば、四分五裂の如く見ゆる各種の仏教中に、同一の系統線の貫通するものあるを發見すべきなり。これを發見すれば、各種の仏教に於て合同一致すべき所以あること自ら知るべきなり。且つそれ、キリスト教は初学入り易く、仏教は初学入り難しと云うものは、他に事情なきにあらざるも、一はその根底の明否に由ると云わざるを得ず。彼は教義単純にして、而も獨一真神の造物者を以て、宗教成立の根底となすこと、一聞一見の下に於てすでに明瞭なり。故に初学入り易し。これは教義繁雜にして、而も何を以て仏教全体の立脚地となすか、その根底明瞭ならず、これその初学入り難く、その要領を得るに苦しむ所以なり。故に第一段に於て立教の根底を明らかにせんとす。すでに立教の根底定まれば、その根底の上に成立する所の仏教、即ち釈迦一代の説教を初めとなし、後代に於て大いに開展し、いよいよ分派せし各種の仏教を、抽象して見るべき方法を講ぜざるべからず。即ち洪博にして又繁雜なる仏教を、概括する方法を講ぜざるべからず。故に根底論に次いで教綱論を設け、仏教總部の大綱要領を弁明せんとす。然るに第一段に於て根底を論づれば、釈迦大悟の涅槃これなりと云わざるを得ざるに至り、又第二段に於て教綱

を論ずれば、各仏教の結帰する所は、かつて釈迦の大悟せし涅槃これなりと云わざるを得ざるに至る。即ち仏教の根本原理と最終理想の一一致るべき所以を知るに至る。これを知ると共に、仏教の組織せられし全部の系統線を発見することを得たり。これを発見すると共に、支離滅裂の如く見ゆる仏教を統一すべき方法を得たり。故に第三に仏教全部の大系を弁明せんとする。然るに大綱論の第一段に於て、論究せんとする立教の根底なるものは、第二段の教綱論に來たれば、即ち仏教の最終理想なる帰着点なり。これに依りて第三段の大系論に來たれば、即ち仏教の中心的本体なりと云わざるを得ざるに至りぬ。これを原始的小乗仏教に就ていわば涅槃と称すべきも、開發的大乘仏教に來たれば、真如・一如・法性・中道・実相等と称すべきものなり。この涅槃と云い、真如と云い、一如と云い、法性と云い、中道と云い、実相と云うものは、實に仏教の根本原理にして、又最終理想なり。故に仏教の中心的本体なりと云わざるを得ず。故にこの者はインド已来研究の中心と成り、又異論の焦点と成り來たる。これを人身に例れば、恰も頭脳の如きものなり。故に原理論と題し、第二編に至りて大いにこれを論ぜんとする。蓋し主としてインド以来二千五百年間に於ける涅槃觀開展の概況を叙述するにあり。

この第二原理論と相対して研究すべき要件は仏陀論なり。仏陀と涅槃を比較するに、その一は理想的にして他の一は擬人的なり。然るにインド已来二者の研究開展の結果を見るに、一方に於て理想的涅槃論の漸く開展せし結果は、後漸く擬人的仏陀論に化し來たり、又他の一方に於て、人格的仏陀論の漸く發達せし結果は、後漸く理想的涅槃論に同化せんとする。これを以て、涅槃と仏陀は、不同にして而も同體たるべき、親密の關係を有し、二者暫くも相離るべからざるものたるに至る。故に涅槃論の必要なると共に、仏陀論また以て大いに必要なり。仏陀にして明瞭ならざれば、宗教としての本尊を暗黒裏に葬るのみならず、また以て根本原理の涅槃

その者も、なおその明瞭を欠くの^{むづか}にあらず。故に第三編に至り、仏陀論と題し、古今幾千年間に亘る仏陀論の大問題を大いに論究せんとす。

第二原理論及び第三仏陀論は、要するに大綱論の第一根底論の開説と見るべし。これに依りて次に大綱論の第二教綱論を開説せざるべからず。即ち二千五百年の間に於ける教界を見るに、最初インドに於て大いに分裂し、支那に來たりて開展し、又日本に來たりて発達し來たる、各種の仏教は、實に亂糸の如く不秩序極まるもの如く見ゆる。これに依りてこの間に於ける系統線を尋ね得て、亂雜に見ゆる仏教の秩序を正さざるべからず。これまで統一的研究として無かるべからざる要論なり。故に第四編に至り教系論と題して、インド以来二千五百年を経過する間に於て、漸く開展し來たる教界全体の系統を明らかにせんとす。

かくの如く大綱論の第二教綱論を広説し終れば、更に進みて大綱論の第三大系論に就て、広説する所なくんばある可からず。これに依りて第三大系論の意を考うるに、仏教組織の根本義は、絶對的眞界と相對的非眞界の間を、入出往還するに在りと云うに帰す。而して入出往還の名目を應用して弁明せんとする根本義なるものは、要するに、各仏教は理論主義のものにあらず、実踐主義のものなりと云うに帰す。これに依りて第三大系論の意を酌量しその名を変更して、第五編に至り実踐論と題し、仏教主義の倫理道德の実踐法に關し、大いに叙述する所あらんとす。余が統一的研究を進行する順序、概略かくの如し。

SAMPLE
Shoshi Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

本論第一
根底論

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第一章 総論

物に本末あり事に終始あり、その本正しからざればその末治らず、故に先ずその本を正し、然る後その末を治めんとするは、蓋し事の順序ならん。今それ仏教はすでに序論に陳ぶる如く繁広にして錯雜を極む、故にこれを研究せんとする者、恰も杳茫たる原野に出でて、その方角を失えるが如く、浩瀚たる大海に浮びて、磁石を有せざるが如き状なきにあらず。故にこの仏教を研究せんとする者は、殊に研究の本末始終を考えて、進行せざるべからず。これに依りて先ず仏教總部の由りて興りし源底を探究せんとするもの、これを題して根底論と云う。故に根底論は研究の端緒にして、而も仏教の大綱を知るに於て最も必要な事件なりとす。

人ありもし比較的にキリスト教と仏教の異同を知らんと欲せば、先ずこの根底論より研究を始めざるべからず。もしそれ成立已後の説明に就て比較すれば、仏基両教の間に類似するもの最も多からん。彼に神と言いこれに仏と言うも、二者何等の異なきが如く見ゆるもの、或いはなきにあらざるべし。然れども歴史眼を以て両教の由りて興りし來歴と共に、両教の依りて成立せし根本的立脚地を討ぬるときは、成立の根底に於て、二者相違あるを発見すべきなり。即ちキリスト教はユダヤ教の系統を承け、人格的天神を以て立教の根底となすこと、日月を併べ懸けたるが如く明白にして、仏教は婆羅門教中、或る一派の系統を承け、理想的涅槃を以て立教の根底となすこと、恰も掌中の玉を見るが如く分明なり。隨いて仏教の性質は、立教の初めに於て、根本的

にキリスト教と同一視すべからざるものあることを知るに至らん。

唯比較的に仏基両教の異同を知るに於て、必要なりと云うにあらず、また以て仏教全体の大綱を提るに於て最も必要なりとす。もしそれ根底確定せざれば、繁雑極まる教理の系統を尋ぬること能わらず、唯教派開展の系統を知ること能わざるのみならず、各仏教の帰着点を知ること能わらず、隨いて統一的研究の結果を見ること能わざるなり。もしそれ仏教の由りて興りし根底の確定するあらんか、隨いて繁雑極まる教派の系統を知ることを得べく、また各教派の等しく趣向する帰着点をも知ることを得べし。故に根底論は最も重要な問題たることを忘るべからず。

然るに仏教全体の立脚地なる根底の何たるは、容易に知るべきものにあらず、又語るべきものにあらず。これを知らんとするも、知識の及ばざるを奈何せん。これを語らんとするも、言語の及ばざるを奈何せん。敢えてこれを云わば、釈迦大悟の心海に印現せし真理これなりと謂うべきのみ。各哲学者が探究して止まざる宇宙の実在これなりと謂うべきのみ。古来仏典中に応用せし語を以てすれば涅槃これなり。或いはこれを真如と云い、一如と云い、法性と云い、実相と云い、中道と云い、第一義諦・妙境界と云う。即ち宇宙の第一義にして、万有の真実体なりと謂うべし。かくの如き宇宙の第一義にして、万有の真実体なるものは、即ち釈迦の大悟界にして、各仏教の由りて興る根底なりと、先ず立教の本を定むべきなり。

余敢えて仏教の根底は釈迦の大悟界にありとし、而もこれを涅槃と名づけ、釈迦四十五年間の横説堅説を始めとなし、釈迦滅後二千五百歳の間に、漸く開展せし各種の仏教は、皆ことごとくこの涅槃の上に樹立する者なりとす。^{けだ}蓋し只一片の憶想にあらず、種々の方面より考察せし結果なり。第一にインド国の歴史に就てこれを考察し、第二に釈迦牟尼氏の伝記に就てこれを考察し、第三に釈迦牟尼仏の遺教に就てこれを考察せし結果

なり。この三方より考察するに、仏教成立の根底は、釈迦、大悟底の涅槃界これなりと云、わざるを得ず。請う後
章を俟ちてこれを知れ。

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

本論第一
教綱論

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第一章 総論

すでに立教の根底を論定し終れば、自下、その根底より発生せし仏教その者の綱領を討ねんとする。これより仏教その者の綱領を討ねんとするに、先ず仏教の成立せし論脈を予知すべし。これを知れば大綱を得るに於て大いに便なる者あり。これに依りてその論脈を考うるに、仏教は二種の論脈に依りて成立せしなり。その一を時間的縁起論と云い、二を空間的実体論と云うべし。所謂時間的縁起論とは現象の因縁を攷究するにあり、所謂空間的実体論とは現象の本体を討究するにあり。仏教博しといえども前二論法を以て、この二条件を説破するの外なきなり。独り仏教に限らず、他の宗教・学術及び俗説に至る迄、およそ物の説明に於て、この二論法に依らざるもの實に稀なり。例せば、吾人が或る事物を見て、その產地・年代、ならびに製造者、又は製造法に関する疑問を発し、これを答弁するが如きことあれば、即ち縁起論と云うべきものなり。又吾人がその事物の性質を尋ね、又その作用を聽くが如きことあれば、即ち実体論の方に属すべきものなり。又学術界に就てその例を求むるに、日本古代の開闢説の如き、支那儒教の太極説の如き、インド婆羅門教の天地開闢論の如き、ユダヤ教及びキリスト教の神造説の如き、西洋哲学の元子論の如き、いずれも皆宇宙万有は何に由り、又如何にして現象せしかの疑問を答弁せし者なれば、皆ことごとく時間的縁起論に属せざるを得ず。又物理学者が、物質不滅・勢力保存の理法を攷究するが如き、生理学者が大脳・小脳・神経纖維の組織を考え、作用を討ぬるが

如き、天文学者が太陽系を放究し、地質学者が地質を説明するが如き、或いは哲学者が宇宙全界を論じて、唯物なり唯心なり純理なりと云うが如きは、いずれも皆万有の本体何ぞやの問題ならびにその作用如何の討究に従事する者なれば、これ等は空間的実体論の方に属せざるを得ず。かくの如く俗界の説を見るも、学界の説を見るも、又我が仏教界の説を見るも、万物の解釈法が期せずして二種に分れ、いずれかその一に従属せざる者なきは、吾人先天的思想の範疇として、時間的に疑問を発せざれば、必ず空間的に疑問を発するに由る自然の結果なるものか。いずれにしても、仏教は根本的釈迦の説教に就て見るも、又後代に開発せしものに就て見るも、二種の論法に依りて成立せしものなり。即ち時間的縁起論は経線の如く、空間的実体論は緯線の如く、互に相依り互に相扶けて、先きに成立し後に開展せしものと云わざるを得ず。故に慧遠すでにこれを弁じ「大乗義章十九、五紙」、源信又左の如く云う。

法華弁体曰。如來法門。雖復算解。若論其要。二種所攝。一者如實空門。二者緣起有門。初句不壞。仮名。而說實相。後句即是不動實相。建立諸法。

然れば縁起実体の二論法を以て仏教を見ることは、余の新按にあらず、古人すでにその考え方ありしなり。但し学界の説ならびに俗間の説と、仏教と、その説全く同じと云うにあらず。解釈法の両様に分れしことは彼此相似たるも、その説に同じからざるものあることは、もとより弁を俟たざるなり。今一、二の例を挙ぐるに、およそ仏教以外の縁起論は皆客観的なり。然るに仏教の縁起論は主観的なり。縁起論に限らず実体論といえども、仏教は主観的方面に重きを置きて論ず。然れども、実体論は縁起論の如く主観的ならざるものあり。独り縁起論に限り、終始一貫して主観的立論ならざるものなし。縁起論の主観的なるは實に仏教の特色なりとす。蓋し仏教縁起論の由りて起りし端緒は、宇宙万有の現象が疑問の端緒となりて興りしにあらず、人生の現象が疑問

の端緒となりて起りしものなり。人生の現象を疑問の端緒となし、而もこれを答弁する方法は、キリスト教等の如く客観的ならず主観的なり。即ち人生の現象より延て、宇宙の現象に及ぼすべき大問題を答弁するに当り、個人的精神作用を以てせしものは仏教なり。苦集滅道の四諦説を初めとなし、十二縁起・頼耶縁起・真如縁起の如き、皆然らざるはなし。故に仏教の縁起論は全然主観的なりと断言せざるを得ず。

又仏教以外の実体論は、仏教より批評すれば、尚これ現象界の範囲にあるものと云わざるを得ず。前に示す如き俗界の説ならばに科学界の説の如きは、尚この現象界の範囲なるべきこともとより弁を俟たず。哲学に於て研究する本体實在と云うものも、吾人の思想上に画出して、論理的に説明するものは、早すでに本体をして現象界に引下ぐるものと云わざるを得ず。眞実の本体、即ち第一義の実相に至りては、常識の上に写象すべき者にあらず。従いて論理的に説明すべきものにあらず、畢竟不可知的なり、不可説的なり、説明已上に位する不可思議界なり。これは論理的説明を以て得べからず、直観的実修の工夫、効積で後漸く得べきものとす。源信公が如実空門と云えるもの即ちこの意を知らしむ。三法印の第三を涅槃寂靜と云うを初めとなし、或いは八不中道と云い、或いは教外別伝・不立文字と云うが如き、皆その意ならざるはなし。要するに、仏教の根底は、他の学術已上の処に置きて見るものと、思ふべし。

且つそれ仏教より見るに、他の宗教及び学術の縁起説に依る者は実体論の方面を能くせず、実体論を取る者は、縁起論の方面を考えずと云う傾きあり。宇宙に始際を見て、万有の先立者を設けしが如きは、即ち縁起論に傾き、実体論の方面を能くせざるが致す所なり。然るに仏教は、縁起論と実体論を経緯の二線の如くに応用し、縁起論の時もその裏面には必ず実体論を安置せしめ、実体論の時もその裏面には必ず縁起論を安置せしめ、総論と横説を、紙の表裏に於けるが如く、布の経緯に於けるが如く、應用して、須臾も離れざらしむ。故に時間

的に宇宙の縁起を論ずるも、宇宙に始際を見て万有の先立者を想像するが如きに至らず。たとい始終を論ずるも、無始無終の中に於て見る始終なるが故に、宇宙は過去を極め未来を尽すも、常にかくの如きものと見て「実体論」、而もその中に於ける、隱顯起伏の生滅始終を論ずるに過ぎざるなり「縁起論」。

要するに、仏教博しといえども、この二論法に依りて成立するものと見るべし。仏教は實に広博なりといえども、時間的縁起論に依りて成立するものにあらざれば、空間的実体論に依りて成立するものと見るべし。然るにこの二論法に依りて成立するもの古今紛然として分る。故にこれより成立的仏教を貫く大綱要領を提んとす。成立的仏教を貫く大綱は四諦・十二縁起・三法印に在りと謂うべし。即ち縁起論は四諦・十二縁起に於て弁明せられ、実体論は三法印に於て説明せられしなり。而して仏教元来多岐なるも、この四諦・十二縁起・三法印を以て貫かざるものあることなきなり。根本的釈迦の説教も開発的後人の説明も、これを以て貫かざるものあることなきが故に、余はこの名目を應用して、自下成立的仏教の大綱を提倡せんとす。即ち四諦説を以て縁起的方面の教綱を弁じ、三法印を以て実体的方面の教綱を論ぜんとする所なり。

SAMPLE
Shoshi-Shinsu1.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

本論第三
大系論

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第一章 総論

幾億幾万の多数人類が、相依りて一の国家を組織するは何に由るか。内に中央政府の在るあり、外に地方政府の在るありて、上下内外交通の、系統的機関周備するに由る。もしこの系統的機関なかりせば、國家を組織する能わざ、隨いて国家一致の活動をなす能わざるなり。又四肢五体よのひの各別なるものが、相依りて一の人身を構成するは何に由るか。内に大脑あり、外に五官ありて、中外交通の神経系統具足するに由る。もしこの神経系統なかりせば、個人を組織する能わざ、隨いて全体一致の活動をなす能わざるなり。

今それ仏教、或いは八万四千の法門ありと云い、或いは大小權実顯密教禪聖淨の部別ありと云う、その状恰も國家を解剖するに、種々の人類あり、人身を解剖するに、四肢五体の別あるに似たり。然るに総合的に仏教と称するを以て見るに、これを国家に例せば、中央政府と地方政府の間に於ける系統の如きものなかるべからず。これを人身に例せば、大脑と五官の間に於ける神系の如きものなかるべからず。然らざれば、解剖的仏教各宗を統一して、一致の運動をなす能わざるなり。余は前來研究の結果としてここにその系統線を發見したれば、今大系論と題し、仏教組織の一大系統を明らかにせんとす。

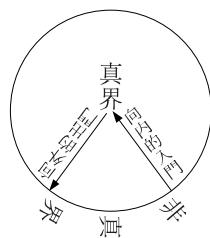
先きに根底論と題し、仏教の由りて来たる根本を討ぬるに、釈迦の大悟界（涅槃）これなりと云わざるを得ざるに至りぬ。次に教綱論と題し、各仏教の綱領を提げ、その帰着する最終理想を考うるに、還た同じく釈迦

の大悟界（涅槃）これなりと云わざるを得ざるに至りぬ。即ち前段に依れば、仏教は涅槃を根本原理として成立するものと云わざるを得ず。又後段に依れば、仏教は涅槃を最終理想として成立するものと云わざるを得ず。これに由りて前二段の結論を合するときは如何、即ち仏教は涅槃より出でて、還たその涅槃に入らんとするものなりと云わざるを得ず。語を換えてこれを云わば、仏教は真如より出でて、還たその真如に入らんとするものなりと云わざるを得ず。更に抽象すれば、仏教は真界と非真界の間を入・出・往・還する橋梁なりと謂うべし。それ神經は一なるも、向内的輸入作用と、向外的輸出作用をなすべき機関たり、又橋梁は一なるも往復両方に応用せらるべきものたり。今それ仏教は一にして二なしとするも、或いは真界より非真界に出現するものなりと謂うべく、或いは非真界より真界に帰入するものなりと謂うべし。もしそれ仏教は真理を説明せしものなりとすれば、則ち真界より非真界に出現する方針を取るものと云わざるを得ず、余はこれを向外的出門なりと云う。もしそれ仏教は実践主義のものなりとすれば、則ち非真界より真界に帰入する方針を取るものと云わざるを得ず。余はこれを向内的入門なりと云う。今この形式図を設けて、これを説明すべし。

仏教に万を以て数うべき經典あり、又千を以て数うべき宗派ありとするも、図に示す如く、真界と非真界の間を、出入往還せざるものあることなし。各仏教は、かくの如き出入往還なる系統的形式の上に組織せられしものなり。故にもしこの形式を以て向かうときは、錯雜極まるが如く見ゆるものも、整理せられざるはなく、支離滅裂するが如く見ゆるものも、統一せられざるはなきなり。

但し図には出入の別を表せんが為め二線を以てするも、実は一線の上の出入往還なり、それは前の神經もしくは橋梁の譬えに就て知るべきなり。橋梁は一なる

第十一図



も通行者の向背に依りて往復の別あるが如く、一種の条件も、或いは入門の往相と成り、又或いは出門の還相と成る。例せば一条件を以て悟他せんとするときは、則ち向外的出門の方なる還相に属せざるを得ず。もしそれの条件を以て自悟せんとするに於ては、これを向内的入門の方なる往相に属せざるを得ず。要するに、自悟的実行の方針を取るものは往相なり、悟他的説明の方針を取るものは還相なりと謂うべし。故に還相は往相の結果なるも、甲の還相即ち悟他の力に引かれて、他の乙丙が自悟的実践の道に上る者ありとすれば、還相に由りて又往相ありと云うことを得る。およそ往くものは還り、還るものは復た往く、昇るものは降り、降るものは復た昇る。例せば百尺竿頭、更に一步を進ましめんとするに於ては、必ず本位に還らざるを得ず。箭や的的中するや、たちまちにその処を発して、本處に還来せんとするが如く、吾人多時実践、その効空しからずして、終に真理を窮め、真理と一致し、真理と默契するに至らんか「往相成仏」、必ずその眞界より出立して非眞界に還らざるを得ず。即ち眞界の何たるを説きて、他を眞界に引導せざるを得ず「還相利他」。この引導に依り他の真を求めるが為め、実践の途に就く者あれば、則ち甲の還相利他に依りて、乙が往相の途に上ると云うものなり。かくの如き往相還相なる系統的形式の上に、成立せるものは仏教なりとす。

かくの如く出入往還なる形式を以て、仏教全部を貫く系統線と見ることは余の創見なるも、古人に徴うところなきにあらず。天台宗に従仮入空・従空出仮と云うもの、禅宗に向上向下と云うもの、淨土教に往相還相と云い、又出入二門と云うものは、即ちこの形式と見て可なり。その他華嚴宗に往復の語あり、諸宗派の上に自利利他の語あり、諸仏に悲智の二門ありと云うもの、また以てこの形式を出でざるなり。請う左の表を見よ。



或いは従仮入空・従空出仮と云い、或いは向上向下と云い、或いは往相還相と云い、或いは入出と云い、或いは往復と云うものは、要するに自利利他なり。自利利他なれば即ち悲智の二門なり。既に悲智の二門なれば、智はその性質、火の熾然として高きに上らんとするが如く、自ら真理を求めて止まざるものなれば、宜しく向上門と謂うべし。又悲はその性質、水の滴々として卑きに下らんとするが如く、己れより卑き者を救わんとするものなれば、須く向下門と謂うべし。仏教はこの向上向下の二門を以て成る、故に諸經諸論として、慈悲の二門の必要を講ぜざるはなく、諸宗諸派として、自利と利他の必具を弁ぜざるものなきなり。經典に就ていさせか、これを証明せん。

『華嚴經』の如来性起品を見るに、如來は常に真如法界に住し、諸の衆生の為め、時々出現して休息することなしと説く。『演義鈔』〔第五十三卷十七紙〕にこれを釈して、如來無尽の化現は皆涅槃の用なりと云えり。『摸大乘論』〔無性觀第三卷〕には、凡べての仏教は皆ことごとく清淨法界等流の説なりと云えり。これに依りて『百論疏』〔下之中三、二十紙〕に、一切經一切論、一として涅槃を明かさんが為めならざるものあることなしと云えり。然れば仏教は、涅槃より出立して、その涅槃の何たるを説明せしものなりと云わざるを得ず、これ即ち向下門なり。

又『涅槃經』の哀歎品を見るに、我れ一切衆生をして涅槃秘密藏の中に安住せしむることを得たりと説く。これに依りて『智度論』には、処々〔第六卷、第二十七卷、第三十卷、第五十五卷〕に、およそ仏教なるものは唯一涅槃に帰向するにあり、これを喻うるに、百川の斎しく大海に入るが如しと云えり。『摸大乘論』〔世親釈（陳記）第十五卷〕に、仏の大悲、衆生を引導して涅槃に向かわしむと云い、『涅槃無名論』に涅槃は三乗の聖者の斎しく帰する所なりと論じ、『百論疏』には、涅槃究竟法凡聖等帰と釈す。然れば仏教の目的は、人をして生死界を出立せしめ、涅槃に趣入せしむるにありと云わざるを得ず、これ即ち向上門なり。この向上と向下を合すれば、仏教は涅槃よ

り出でて、又涅槃に入らんとする形式的系統線の上に、組織せられしものなること明白なり。更にこの向上向下の二方針合説の明文を掲げん。

不思議仮境界經曰、有_レ往有_レ復、名_レ修_レ菩薩道、云何名為_レ有往有_レ復、觀_レ諸衆生心所_レ樂欲、名_レ之為_レ往、隨_レ其所應、而為_レ說_レ法、名_レ之為_レ復、自入_レ三昧、名_レ之為_レ往、令_レ諸衆生得_レ於三昧、名_レ之為_レ復、自行_レ聖道、名_レ之為_レ往、令_レ諸衆生皆得_レ此忍、名_レ之為_レ復、自以_レ方便_レ出_レ於生死、名_レ之為_レ往、又令_レ衆生而得出離、名_レ之為_レ復、心樂_レ寂靜、名_レ之為_レ往、常在_レ生死、教化衆生、名_レ之為_レ復、自動觀察往復之行、名_レ之為_レ往、為_レ諸衆生說_レ如_レ斯法、名_レ之為_レ復、修_レ空無相無願解脫、名_レ之為_レ往、為_レ令_レ衆生斷_レ於三種覓觀心故、而為_レ說_レ法名_レ之為_レ復、堅發_レ誓願、名_レ之為_レ往、隨_レ其誓願、拯濟衆生、名_レ之為_レ復、發_レ善提心、願坐_レ道場、名_レ之為_レ往、具修_レ菩薩所行之行、名_レ之為_レ復、是名_レ菩薩往復之道、〔已上經文〕澄觀釈曰、上来十對、皆上句自利為_レ往、往_レ涅槃故、下句利他為_レ復、復_レ於生死、化衆生故、〔華嚴玄談第一（九紙）〕

大日經曰、如來知一切分別本性空、似_レ方便波羅蜜力、故、而於_レ無為_レ、以_レ有為_レ為_レ表、展轉相應、為_レ衆生示現、遍_レ法界、〔已上向外的〕、令_レ得_レ見_レ法安樂住、發_レ歡喜心、〔已上向內門 第三卷出〕

同經疏曰、以_レ無為性即不_レ異、有為_レ了達如_レ是甚深緣起法故、能以_レ此有為_レ、即成_レ無為之果、〔已上向內門也〕、是故一切三世如來、以_レ方便力故、雖_レ証_レ法界、而能從_レ此無為無作本體之果、而以_レ有為_レ作_レ、諸眷屬、如_レ大日如來、於_レ自証之德、以_レ加持力故、現_レ十方世界微塵金剛菩薩、一一以_レ真言門、引_レ攝衆生、皆令_レ得_レ至_レ無為果、〔已上向外門也 疏第十一卷 義釈第九卷（六紙）〕

又曰、（上略）從_レ如來、則從_レ深至_レ淺、從_レ內漸_レ外、而成_レ三重壇、從_レ衆生、則從_レ淺至_レ深、從_レ外

漸^シ内、而成^ミ三重壇^{タツ}也、（下略）〔疏第二十二卷、義釈第十四卷（四十八紙）〕

但しこれは大乗仏教の理想より出する解釈にして、小乗仏教の理想より出する解釈にあらず。小乗は所謂涅槃を死物的性質のものと見るが故に、彼の教理としては、向内的入門の解釈をなし得るも、向外的出門の解釈をなすこと能わざるなり。大乗は所謂涅槃を以て大活動的性質のものと見るが故に、かくの如き解釈をなし得るなり。請う第二編原理論を見てこれを知れ。

且つそれ前の教綱論は歴史眼を主として研究し、今この大系論は教理眼を主として考究す。故に多少の径庭なきにあらず。多少の径庭あるも衝突にあらず、一致すべき所以あり。何となれば、およそ歴史的に開展するものは、初めより開展すべき所以あるに由るものなればなり。

SAMPLE
Shoshi-Shinsu.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SMPLE
仏教統一論 第二編 原理論
Shoshi-Shinsui.com

自序

吾人人類は真理の子なり。果して然れば真理の親を求むるの心なからべからず、偶々これを求むるの心あれば、則ちその親に従わざるべからず。いやしくも真理の子にして真理の親を求むる心なければ、則ち不忠にあらずして何ぞや。偶々真理の親を求むることあるも、これを求めてこれに順う心なければ、則ち不孝にあらずして何ぞや。ここに余輩不敏なりといえども、不忠不孝の子たるに忍びずして、敢えて真理の親を求め、以てその真理の親に隨順せんとす。

これに依りて真理の親を求めるとするに、世に科学あり哲学あり又宗教ありて、いずれも皆共に吾人人類に真理を顯彰せんとす。然れども余は科学に依りて真理を求めるとする者にあらず、將た又哲学に依りて真理を求めるとする者にあらず、一に宗教、特に仏教に依りて真理を求めるとする者なり。世に新宗教主張者あり、彼れ等或いはおもえらく、方今宇内に現存せる宗教、その數決して二、三にして止まらず、然れども今日にあってはこれ等特殊の宗教は、到底吾人人類の標的となすに足るべきものなし。隨いて今後吾人人類が依りて以て標的となすに足るべきものは、宜しく広く各學術及び各宗教の精髓を捉え来たりてこれを一丸となし、當に時勢に適応すべき新宗教を建設すべしと。その言頗る効切なもの如し。もし彼等をして余を評せしむれば、或いは云わん、その思想や頗る偏狹なりと。

余の寡聞淺識なる、未だ科学を修めず、哲学を修めず、又博く世界各種の宗教を究めず、唯僅に仏教を研究せるのみ。これを以て余の如き井蛙に類する者は、論者の如き博大なる希望を発さんと欲するも発すを得ず。加之、余を以てこれを想うに、論者の説の如き或いは空中に樓閣を建設するに等しき、空想に終らざるやの疑惑なきにあらざるなり。

然れども余の思想は、仏教中或る一派に就て真理を求めるとする者にあらず、古來進化發展し來たれる仏教各宗各派の説を集め、或いは歴史的にこれを考え、或いは比較的にこれを考え、或いは批評的にこれを研鑽したりて、各方面より真理の親を求めるとする者なり。かくの如きは、決して空中に樓閣を建設するが如き、不可能の業にあらざるべし。例せば仏教とキリスト教との如きは、根本的にその歴史を異にするが故に、両教の優勝点を併せて一丸となさんとするは、一見理論上頗る易々たるが如きも、實際上極めて至難の業ならん。勿論仏教中には種々異宗異派あれども、根本的にその歴史を一にするが故に、その方法に依りては、或いは各方面よりその優勝点を捉え来たりてこれを一丸となし、以て真理の親を写象せんこと、敢えて不可能の業にあらざるべし。古來教相家が、必ず偏教を嫌い円教たらんことを欲求せる所以、即ちこれにありて存すと謂うべし。

故に余が研究の方法は、初めより仏教を選択せるの嫌ありといえども、その仏教中に於けるや、既定の宗派を以てせざりき。元来宗派は研究の前にありて既定すべきものにあらず、既定の結果として後に自ら成立すべきものなり。加之既定の宗派あれば、その研究や必ず既定の宗派に拘束せられ、公平を持続して明確なる断定を下す能わざるの虞あり。これを以て余は本と真宗に關係あるにも係わらず、本論の研究に於ては、初めより既に全く無宗無派の見地に超立し、以ていささかその歩武を進行せしめたり。本編の結論が終に浄土教に帰趣するに至りしが如き、眞に研究上止むを得ざる自然の結果にして、もとより最初の予期に出でしところに

あらざるなり、請う読者これを余の故意に出でしものと思うこと勿れ。

明治三十六年三月十日

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

著
者
識

再 版 の 辞

本書第一編大綱論を刊行するや、読者諸君にして批評の勞を取られし人最も多かりき。これに依りてそが批評集なるもの東京より出で、また京都よりも出^いづ。然り而して本年四月に至り、第二編原理論を刊行するや、これが批評の筆を執りし人また少なからず、雑誌に新聞に、すでに幾十種の批評あるを見聞するに至れり。余はこれら批評家諸君に対し大いに感謝せざるを得ず。余は批評家諸君の勞を謝すると共に、また自ら答弁すべき責任を有する者なるを知る。然りといえども、余は未だこれが答弁をなさざる所以のもの蓋^{カバ}し他にあらず、一は批評の余り多きがため、一々これが答弁をなすの閑日月を得ざるに由るといえども、また一は後編成れば前編に対する批評の答弁の無用たるを信ずれば也。

多数の批評家を見るに、著者の意を酌量する人は甚だ稀れにして、ただ一編の文を読み、これを以て全部完結のものとして、批評する人最も多きやに覺ゆ、これ余の最も憾みとする所なり。先きに大綱論の出づるや、多数の批評家は口を揃えて云わんとす、教理に對し史的開展あるを考えざるものなりと。又云わんとす、教相の差別を思わざるものなりと。又云わんとす、各宗派の特長を破るものなりと種々評し來たりて統一てうことの成立を疑えり。然るに彼の批評家にしてこの第二編原理論を一読すれば先きの疑難はほぼ氷解するに至らん。

今まで原理論を発行するや、多数の批評家は同じく云わんとす、著者自ら歴史を重んずるにも係わらず、史

的事実を破壊したりと。又云わんとす、思想循環の形式を設けて全部を組織せんとすれども、その実は循環にあらず、ただ一周の回転に過ぎざるなりと。又云わんとす、果して循環するあれば、浄土教の後に発展すべきもの多々なるべからずと。然るにこれらの批評も前と同じく第四編教系論を公けにするに至れば、自ら消滅すべきなり。故に余は敢えて答弁の労を取らざるなり。

もしそれ先きの批評家諸君にして、第一編の序論によく注意あれば、恐らくはその疑難の輕忽に発すべからざるものあらん。又今の批評家にして、第二編の序論に着眼するあれば、必ずしも後の批評の容易になすべからざるものあるを認むるならん。ただここに注意ありしは、北沢常盤両学士の批評なりとす（北沢君の批評は哲学雑誌第百九十九号に出で常盤君の批評は教育界第二卷第十一号に出づ）。

今や本編の再版に際し、いささか本文を訂正する所あると共に、かくはものして再版の辞となしぬ。

明治三十六年十月十日

著者村上専精記す

SAMPLE
Shoshi-Shanshui.com

凡例

(一) 仏教に二種の部門あり、その一を向上門と名づけその二を向下門と云う。その向上門は即ち觀念門にして、その向下門は即ち教相門なり。而して本編の如きは所謂教相門に就て全部の系統を考うるにあり、所謂觀念門の如きは今の所論にあらず。

(二) 宗教の要は実践にありといえども、その実践法を指導するに就て、また研究の必要なきにあらず。世に宗教学の行わるるあるが如く、仏教界に於て古来教相論の盛んなりし所以、また實にここにありて存す。故に最後の目的は実践にありといえども、本編の如きは理論的にその教相の差別を研究して、統一的系統ある所以を明らかにするを以て第一の主眼となす。これを実践する方法の如きは他日に譲らんとす。

(三) 本論第一編の主意は、各宗差別の中に平等の理ある所以を説破せんとするにありしも、今や第二編に來たりては、平等の一理開展して種々差別の宗派を生じ来たりし所以を攷究するにあり、これ前編と主意の相反するところなり。

(四) 古来分裂せし宗派をことごとく数え來れば、幾十種あるや殆んど知るべからず。然れども今やその著大なるものに就て、開展の大系を研究するのみ。その小なるものに至りては、ここに尽すべき限りにあらざるなり。

(五) 本編各章の中に於て、淨土教の下に限り引文甚だ多し。而もその引文の多数真宗の典籍より求め來たりしものは、読者或いは異様の觀あらん。蓋し本論第一編を読んで、真宗を破壊するかの如く妄想を懷きし者あるが故に、今や真宗の聖典に依りて、余の見解は決して真宗の教理と衝突するものにあらざる所以を證明せんとするにあり。余他の条項は総べて第一編の凡例に就て知るべし。

明治三十六年三月

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

序

論

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第一章 歴史的研究の必要

哲学にあれ、宗教にあれ、又文学にあれ、およそ長く世に存せるものは、皆歴史的研究を待ちて、初めてそれが明瞭なる解決を獲得すべきなり。蓋し歴史的研究法とは、既往多年間に経過せる、千状万態の史的事実を闡明にし、或いは比較的にこれを批評し、或いは論理的にこれを判断する所に於て、初めて釈然たる解決を得るにあり。故におよそ学術研究の方法にして、歴史的研究に期待するところあらざらんか、その結果や、必ず自ら独断的推理に奔り走りて、遂に荒誕不稽の渦中に浮沈し、ただにそが峻明なる真相を了得せざるのみならず、間々自ら欺き、又世を惑わすの虞なしとせず。^{おそれ}豈に戒心せずして可ならんや。これを以て近時この種の研究法が、如何に迅速なる発展を試み、如何に猛烈なる潮勢を示し、如何に学界に緊要のものと成り来たれるや、既に有識の士が一般に認容する所なり。

古来洋の東西に隆替興亡せる幾多の思想は、皆社会百般の刺戟を受けて、或いは衝突と成り、或いは波瀾と成り、或いは改革と成り、その間に幾度か時勢風潮と共に変遷推移して、進化発展の時期に会遇し、以て種々の開展をなせるは、既に歴史の証明するところにして、秋毫も怪しむに足らず。支那にありては、孔子春秋戦国の際に生れ、礼儀の廢頽せるを痛く慷慨し、克く古聖先賢の遺訓を紹ぎ、主として人生彝倫^{いりん}の実践的道義を鼓吹して、所謂儒教哲学を大成せり。老子は少しく孔子に先だちて生れ、渾沌たる社会の趨勢を大いに慨嘆し、

孔子が極めて易簡直截の学風を唱道せるに異なり、反面的に頗る虚無恬淡の学説を主張せり。爾来孔老の一教は、永く漢・唐・宋・元・明・清に亘りて、一は時に訓古学と成り、時に性理学と成り、時に考証学と成り、一は所謂道教と化して、支那民間に偉大なる勢力を占め、その進化発展、もとより一ならざりしといえども、とにかく支那全国に亘れる思想史の表裏を構成するに至りぬ。更に翻りて泰西の思潮を瞥見するに、遠くギリシャの半島に興りし哲学は、既にキリスト教成立以前にありて、宗教的動機を暗示せるものあり、後年キリスト教の成熟するに及びて、冥々の裡に彼れとこれと融合調和して、泰西の全思想界に於ける二大潮流と成り、爾來一は哲学として、一は宗教として、社会風潮の動搖に呼応し、共に開展にまた開展を重ね、変遷にまた変遷を経て、漸く現下の泰西日新の顯著なる文運を実現するに至りぬ。およそこれ等の的例は、古今東西に少なしとせず。これに依りてこれを観れば、古今東西に栄枯盛衰せる思想は、一として皆進歩開展の紛糾錯雜せる道程を経由し來たりて、ここに初めてそが眞面目を啓發せざるはなきの旨趣、自ら想見すべきなり。既に支那思潮然り、泰西思潮もまた然り、豈に獨り仏教思潮のみ然らざるの理あらんや。

今や仏教世に実現してより、既に二千幾百年の久しきに及び、その教説の普及せるところ、殆んど東亜の半球に瀰漫し、南はセイロン・シャム・ビルマ・安南に伝播し、北は蒙古・満洲・支那・朝鮮及び日本に蔓延し、一を南方仏教と称し、一を北方仏教と称す。而してこの南北両仏教を比較するに、教理にあれ、儀式にあれ、制度にあれ、一見殆んど異種別物の如き觀あらしむるもの多し。蓋^{けた}しその原由たるや、もとより二、三にして足らずといえども、畢竟^{ひつきよう}一は自國にありて進化を試み、一は幾多異域蔓延の間に發展せる結果として、今日彼此の間に著大なる相違を見るものなきにしもあらざるべし。果して然らば、北方仏教は南方仏教に比して、特に一層その歴史的研究の重要な、決して軽々に看過すべからざるものあり。いやしくも歴史的研究を度外視し

去れば、ただに北方仏教と南方仏教との異同を究明するに於て困難なるのみならず、又北方仏教の如き、異議百出、四分五裂せるものを一括して、克くこれが統一的考察を果遂せんは、頗る不可能の事に属すと謂うべし。然るに退て私かに古来に於ける仏教研究法を見るに、歴史的研究法を重要視せずして、むしろこれを眼中に描かざるの状勢あるは、豈に学に志ある者の袖手傍観すべきの旧弊ならんや。すなわち余浅学菲才なるを顧みず、自ら進みて歴史的研究を仏教思想発達の上に試みんとす。

SAMPLE
Shoshi-Shinsu1.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SMPLE
仏教統一論 第三編 仏陀論
Shoshi-Shinsui.com

自序

およそ哲学の中心は真理にありとすれば、宗教の中心は本尊にありて存すというも、敢えて不可なかるべし。キリスト教にありて神を本尊となし、仏教にありて仏陀を本尊となせるものは、即ち仏基両教の中心たるべき者にあらずして何ぞや。果して然りとすれば、キリスト教にありて、神の何たるやを究めることの必須欠くべからざるが如く、仏教にありて、仏陀の何たるやを研鑽すること、また以て頗る重要な問題なること、敢えて喋々を要せざるなり。それ神と称し仏陀と号するもの、哲学を以てこれを観れば、世界の大真理なりといべきものなれども、更に宗教を以てこれを観れば、神は神として独立せる所以なかるべからず、また仏陀は仏陀として独立せる所以なかるべからず、もし然らざれば、宗教の特色はこれを那辺に求め得べきや。ここに於てキリスト教にありては神を討究するの急務を促し、仏教にありては仏陀を研究するの要務を生じ来たれり。余が第二編原理論の外に、更に又仏陀論を草する所以ここにありて存す。

人ややもすれば謂わんとす、凡そ宗教は信仰にありて理論にあらず、従いて宗教に関する研究の如きは、益なき徒労に属すべきものなりと。豈にそれ然らんや。もし宗教は研究を要せざるものなれば、吾人何に依りて宗教を選択すべきや。又宗教は實に吾人々類を驅りて迷信の深淵に惑溺せしめ易きものなりといわざるべからず。加之、論者が宗教は信仰にありて理論にあらずといえるも、また同じく一種の理論にあらずして、そもそも

ぞや。元来信仰なるものは、理論と全然背馳して冰炭相容れざるものなるや否やは、一の問題たるを免れざるなり。すなわち余は謂わんとす、信仰は人々知識の程度に順応し、各自理論その極致に到達せる暁に於て方に成立すべきものなりと。仮りにキリスト教の如きは、情的宗教なるが故に知的研究の必要これなしとなすも、仏教の如きは、本来知的宗教なるが故に、又知的研究の必要あり。所謂煩惱に就きて見惑思惑を弁ずるが如きは、即ち知的研究の急務なる所以を証明して余りあるものなりと謂うべし。これ故に研究的態度を以て仏教に趣向せんと欲する有道の士を、徒らに排斥して顧みざる者は、未だ深く仏教を学ばざる途上人士の言なるのみ、いやしくも少しく知識を有する者、誰かその言に従わんや。すなわち想うべし、余が原理論に加うるに、又この仏陀論を以てする所以を。これ決して仏教の精神に背反せるものにあらず。かくの如く研究的態度を以て、仏教を論究するは、即ちインド以来一糸連綿として絶えざる先賢の遺風を願学するところなり。余豈に敢えて贅論を好む者ならんや。

然れども仏教が哲学にあらずして宗教たる以上は、研究はもとよりその終局の目的となすところにあらず、畢竟その帰宿するところは、実践躬行にありて存するや、他言を要せざるところなり。これを以て余は最初仏教統一論起草の時に、予め第五編に至りて実践論を公にせんことを約せり。もし単に研究を以て終局の目的となすが如く思惟せる者あらば、これ恰も悲觀的厭世主義を以て、仏教の真精神なるが如く思惟せる者とその類を同じゆうすというべし。そも悲觀的厭世は仏教に入るの閥門にして、未だ堂奥にあらざるなり。これと同じく、研究は信仰に進むの要路にして、もとよりその本領にあらざるや、識者を待ちて後知るところにあらざるなり。方に第三編仏陀論を上梓するに際し、いさか無言を陳じ、以て自序に代うと云爾。

明治三十七年九月一日

著者識

凡例

(一) 本編は歴史上に於ける釈迦を伝述せんとするにあらずして、むしろ歴史以上に於ける仏陀を講究せんとするにあり、隨いて歴史上に於ける釈迦の伝述、自ら考証的ならざる所以、實にここにありて存す。

(二) 本編叙述の順序は、第二編原理論の如くならざるものあり、これ余が第二編を草する時と、第三編を稿する時とに於ける思想の進化なり。今や教理的研究なりといえども、むしろ歴史の順序に背戾せざらんことを惟れ努め、敢えてその順序を更改せり。

(三) 宗派に就きて仏陀論を研究せんには、勢い須らく地論宗、撰論宗及び涅槃宗の仏陀論をも、併せて研鑽せざるべからず。然るに本編にこれ等の仏陀論を叙述せざる所以のものは、いづれも後日他宗派に屬して、独立的資格なきと共に、又特に仏陀論として講究すべき要點を發見せざればなり。

(四) 教理と教祖とに就きて、その發展を考察するに、彼此の異同これありといえども、發展の結果として、二者の間に密接不離の関係を具有す、これに依りて本編中、間々第二編と重複するところなきにあらず、これ読者の諒察を要するところなり。

(五) 本編前後五編は、世の識者に対する鄙見を陳述するところにして、もとより教育なき村老野嫗に対する著述にあらざるなり。庶^{へりがわ}幾くは読者直に本編の所説を採りて、下流社会に対する布教の資料に供するなからん

ことを。

明治三十七年九月一日

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

序

論

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第一章 宗教と教祖との関係

政治法律にあれ、又学術宗教にあれ、およそ社会的現象は、世に俊傑偉聖の出現を待ちて、始めてここにその開展を見るに至れるは、何人も疑いを容れざる事実なりとす。然れども、比較的に全く崇高なる偉聖の感化力に基きて勃興し来たれるものは、独り宗教にあらざるか。彼の政治の如き、法律の如き、もとより非凡なる英才の出世を待ちて、或いは創始し、或いは改造せらるべきといえども、時に或いは社会風潮の需要に呼応し止むなく改造せらるるものこれなきにあらず。然れどもこれ等は宗教の如く一個人の力に依ること頗る稀にして、多くは共同的商議の下に成立するものなり。本邦明治新政の如き、即ちこの好適例なりといふべし。又学術の如きは、一個人の発明に関するもの多くして共同的商議の下に成立するもの鮮少なりといえども、宗教の如く、これを開創せる人の人格如何に依りて興廢すべきものにあらず、唯その説の如何に準じて消長するものなり。これを以て学術と人格との関係は殆んどこれなきものの如し。例せば近時一般に天動説漸くその勢いを減殺せると共に、地動説熾んに行わるるが如き即ちこれなり。これに反して、独り宗教は、全く人格の如何に準じて興廢するものなり。一世を風靡するに足るべき俊傑偉聖にして、而もまたその人の現代及び未来を通じて、広く民衆に偉大なる感化を与うるに堪ゆべき、熱誠の徳者出づるあれば、時處を択ばず、その人の全力に依りて興るべきものは宗教なり。語を換えてこれをいわば、宗教はその説の如何に依りて興廢すといわんより。

も、むしろ人格の如何に依りて興廢す。というべきものなり、惟うに人格の如何と宗教の興廢とはその間に密接不離の至大なる関係の存することは、何人も疑を容れざるところならん。

但し宗教といえども、その興廢が社会時勢の変潮に際し、多少の影響を受くるものなきにあらず、又その説の如何が時と處とに依りて、興廢存亡の上に全く関係なきにあらず、然れども世に宗教の興るや、その主要な淵源は、教祖の人格にありて存することは、断じて疑うべからず。前述せる如く、宗教は政治の如く法律の如く、共同的商議に依りて成立すべきものにあらず、又学術の如くその説の如何に依りて應用せらるべきものにあらず、唯教祖の性格に、芙蓉の峯が巍然として千山万岳の間に頭角を露わせる如く、又その人の信念に、堅牢なる金剛の如きものあり、隨いてその人の熱誠に火の焰々燃ゆるが如きものありて、ここに始めて開立すべきものなり。今世界の二大宗教に就きてこれを考うるに、真個事実の然るを見るべし。即ち今より二十世紀以前に、ユダヤ国にありてキリスト教の興りしは、キリストその人の全力にあらずして何ぞや。又今よりおよそ二十五世紀以前に当り、インド国に於て仏教の開けしは、釈迦その人の全力にあらずして何ぞや。もしキリストの出現なかりせば、當時キリスト教の興らざるは無論なり。又たとい彼れが出現するも、いやしくもその性格にして常人に超越せるものなかりせば、キリスト教の成立は得て望むべからず。これと同様く、釈尊の出現なかりせば、當時仏教の興らざるは無論なり。又たとい釈尊の出現あるも、もし彼れにして、巍々として眞に世尊たるの性格を有するにあらざれば、仏教の創始は得て期すべからざるは、まことに火を睹るよりもなお明白なりといふべし。

ただに最初の開立に於てのみ然るにあらず、後代の持続もまた教祖の余光に依るものあるや大なり、仏教にあれ、キリスト教にあれ、将たその他の宗教にあれ、およそ宗教が開立以後幾多の歳月を経過して、連綿持続

するものは、他に種々の原因事情の存するありといえども、教祖その人に対する信念の冷却せざるもの、与りて大いに力ありといわざるを得ず。例せばキリスト教徒がキリストを見て、彼は常人に非ず神の子なり、吾人のための贖罪者なりと信じて疑わざりしは、二十世紀以前のキリスト教をして、二十世紀の今日に至るまで、存続し来たれる主要なる原因にあらざるか。これと同じく、仏教徒が釈尊を見て、彼は凡人にあらず仏陀なり、その外形は人類なるが如くなれども、真個人類の規則を脱せざるものあり、但しその実は久遠の古仏が、吾人のために人類の形骸を示現し來たれる者なり、彼は大智慧者なり、大慈悲者なり、吾人のためには精神上の灯明台なり、又父母なり、吾人は彼れを離れて何事をも得て知るべき明なき盲人なり、又他に信頼すべき所なき孤児なりと懷う信念は、實に二十五世紀以前の仏教をして、遙かに今日に伝承し來たらしめ、今なお全世界中宗教の第一位を占むるの主因にあらざるか。

仏教は釈尊の出世に依りて開立せりといえども、釈尊在世の時は所謂中印度、即ち恒河一帯の地方に勃然として急発せるに止まり、未だ広く遠境の地に伝播するに至らざりしなり。然るに釈尊の滅後その遺教漸く四方に伝播するや、その潮勢真に滔々乎として防遏すべからざるものあり。これに依りて、今や最初の產地なる中印度にありては、既にその痕跡の断えなんとする悲運に遭遇せりといえども、所謂南方仏教なるものは、シャム・セイロン・ビルマ・安南等の地方を占領し、又所謂北方仏教なるものは、北印度・カシミールの方面より、中央アジアを経て、今の蒙古・西藏・支那・朝鮮・日本等の地方に普及し、その区域の博大なる、殆んど東亜の全局面に達せり。隨いて全世界中いすれの宗教といえども、多數の信徒を有すること、敢えて仏教と比肩すべきものなし。「リース・デビズ」氏の調査せる統計に依れば、仏教は全世界中なお五億の信徒を有すといえるにあらずや。その統計表を左に示すべし。

百人に対する比例

拝火教徒	十五万人
シック教徒	百八十九万四千七百二十三人
ユダヤ教徒	七百万人
キリスト教徒 〔新旧合併〕	三億二千七百万人
婆羅門教徒	二億人
回々教徒	一億五千五百万人
仏教徒	五億人
その他の教徒	一億人
計	約十三億人

(千八百九十九年出版の「仏教」に拠る)

かくの如き統計はもとより正確のものにあらずといえども、又幾分の参考に資すべきものなきにあらず、もしこの統計表に依りてこれを考うれば、世界の宗教徒十三億中、五分の二は仏教信徒なりといわざるべからず。嗚呼また盛んなりと称すべし。

そもそもかくの如く今日に至り仏教の盛観なお失墜せざるものあるは、釈尊の滅後陸續として有数の伝道者、輩出せしに職由せんばあらず、即ち或いは阿育王の如き、或いは迦膩色伽王の如き、有力なる外護者ありしに原由し、又その教義の卓然外教に超越せる所あるに起因せざるべからず。然れども更に進みて、その由りて來たれる淵源を尋究すれば、釈尊に対する信念の炎々たる熱誠が致せる所にあらざるか。語を換えてこれをいわば、釈尊高徳の余光の然らしむるところにあらざるか。實に釈尊の性格の円満なるや、恰も峩々たる雪山の

群岳に一頭地を抜きて、卓出せるが如きものあると共に、弟子輩の彼れに対する信念の淵、深くして底なきものありし結果は、延いて倏忽の間その当時幾多の教団を造るに至り、後世に至りては、その遺教を四方に伝播せしめ、又これを永く千載の後に綿々存続せしむるに至りしならん。これに由りてこれを観れば、宗教その者の者と教祖その人との関係の極めて親密不離なること自ら想察すべきなり。

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com